

第1章 下田市の歴史的風致形成の背景

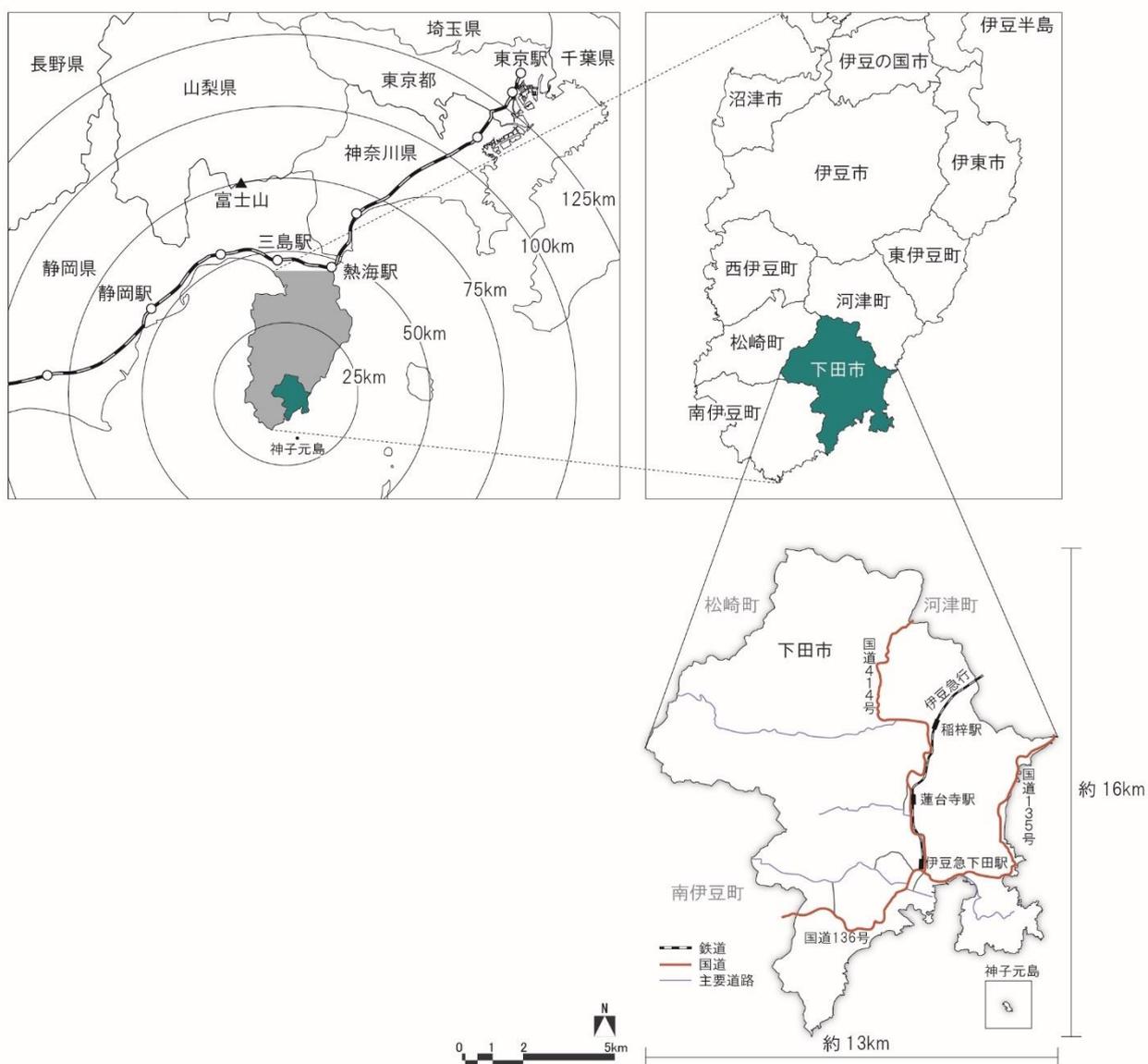
1 自然的環境

(1) 位置

下田市は、静岡県東南部、伊豆半島の南部東側に位置しており、直線で東京都心からは約140km、熱海・三島からは約50kmのところにある。

市域は東西約13km、南北約16km、面積は104.38km²の規模を有し、北は河津町、西は松崎町と南伊豆町に接している。

また、下田港から南へ約11km離れた太平洋上に^{みこもとじま}神子元島があり、面積は、約0.1km²である。



下田市位置図

(2) 地勢

下田市は、天城山系の南端から太平洋に至る豊かな自然環境に恵まれ、天城山系から続く急峻な山々と約 47 km に及ぶ海岸線は、下田を特徴付ける美しい景観をかたちづくっている。特に海上からは、緑豊かな起伏に富んだ地形や海に突き出した岬、岩の小島などに演出される下田固有の風景を見ることができる。

伊豆半島は、今から 2,000 万年ほど前に本州から南へ 1,500 km くらい離れた今の^{いおうじま}硫黄島あたりで海底の噴火によってでき始めたと考えられている。1,000 万年ほど前になると、海底火山は海面まで盛り上がるほど大きくなり、100 万年前ごろに本州に衝突し、50 万年ほど前に現在のような半島になったと考えられている。このような活動が、変化に富む美しい伊豆の山々や海岸線、温泉などの独特な自然環境を生み出した。

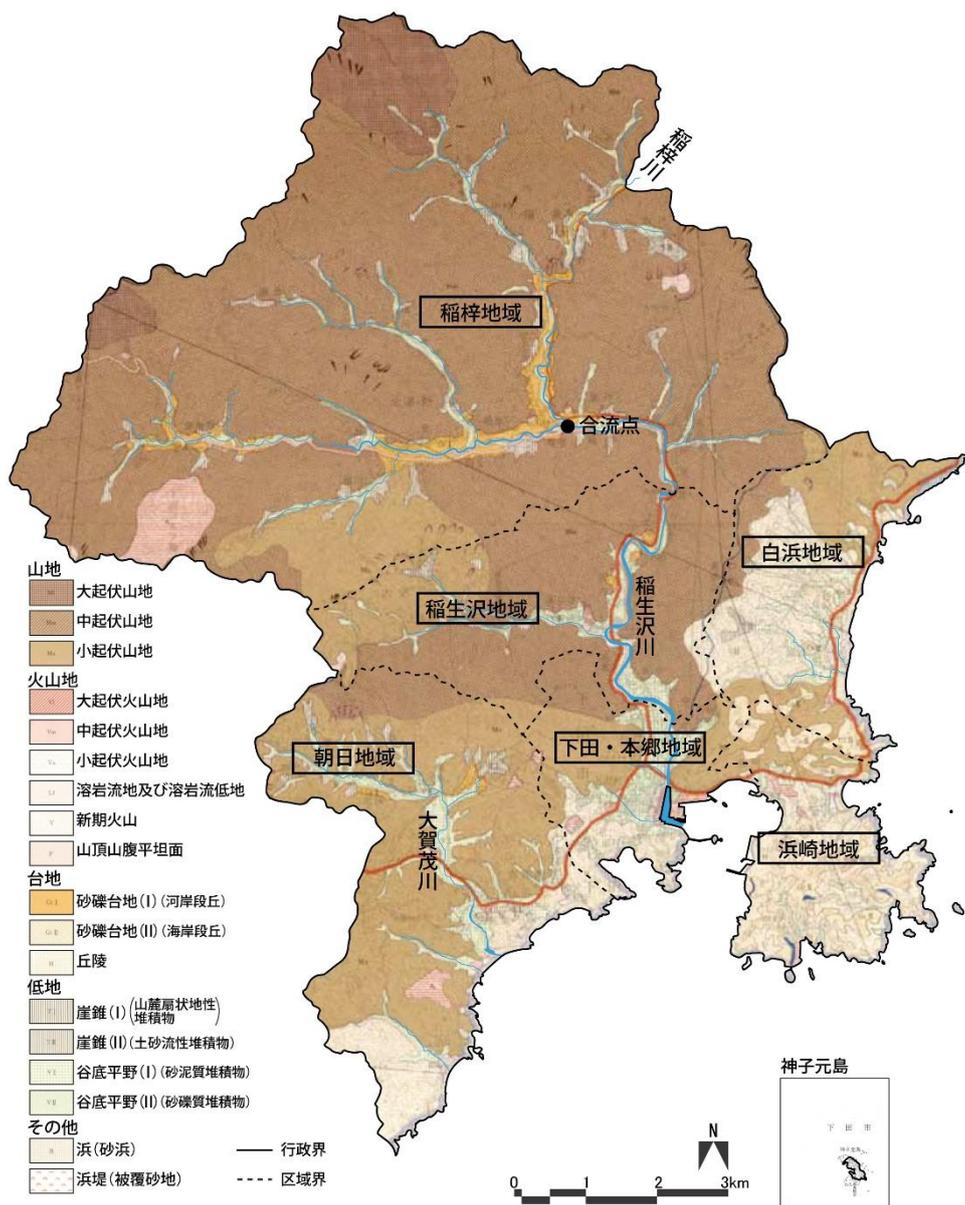
下田市を特徴付ける地形に下田湾があるが、海底が盛り上がり陸地になった^{すざき}須崎半島が、^{あかねじま}赤根島との間に深く入り込んだ谷をつくって生まれたと考えられ、この地形を生かし、古来より東西海上交通の要衝として港町が形成された。ペリー提督（^{マシュー カルブレイス ペリー} Matthew Calbraith Perry）が来航した幕末期は、下田が日本初の開港場となり注目を浴びることとなったが、『ペリー艦隊日本遠征記（安政3年（1856））』によれば、下田湾が外洋と接し、安全かつ容易に船の出入りができる点が、ペリー提督を満足させたようである。



下田湾周辺

①地形

地形は、大部分が起伏に富んだ山地である。稲生沢川と稲梓川合流点付近より上流部の稲梓地域には、砂礫で構成される河岸段丘^{※1}が形成され、稲生沢地域や下田・本郷地域といった下流部には、砂礫や砂泥で覆われる谷底平野^{※2}、浜崎地域や白浜地域では台地及び丘陵地が形成されている。



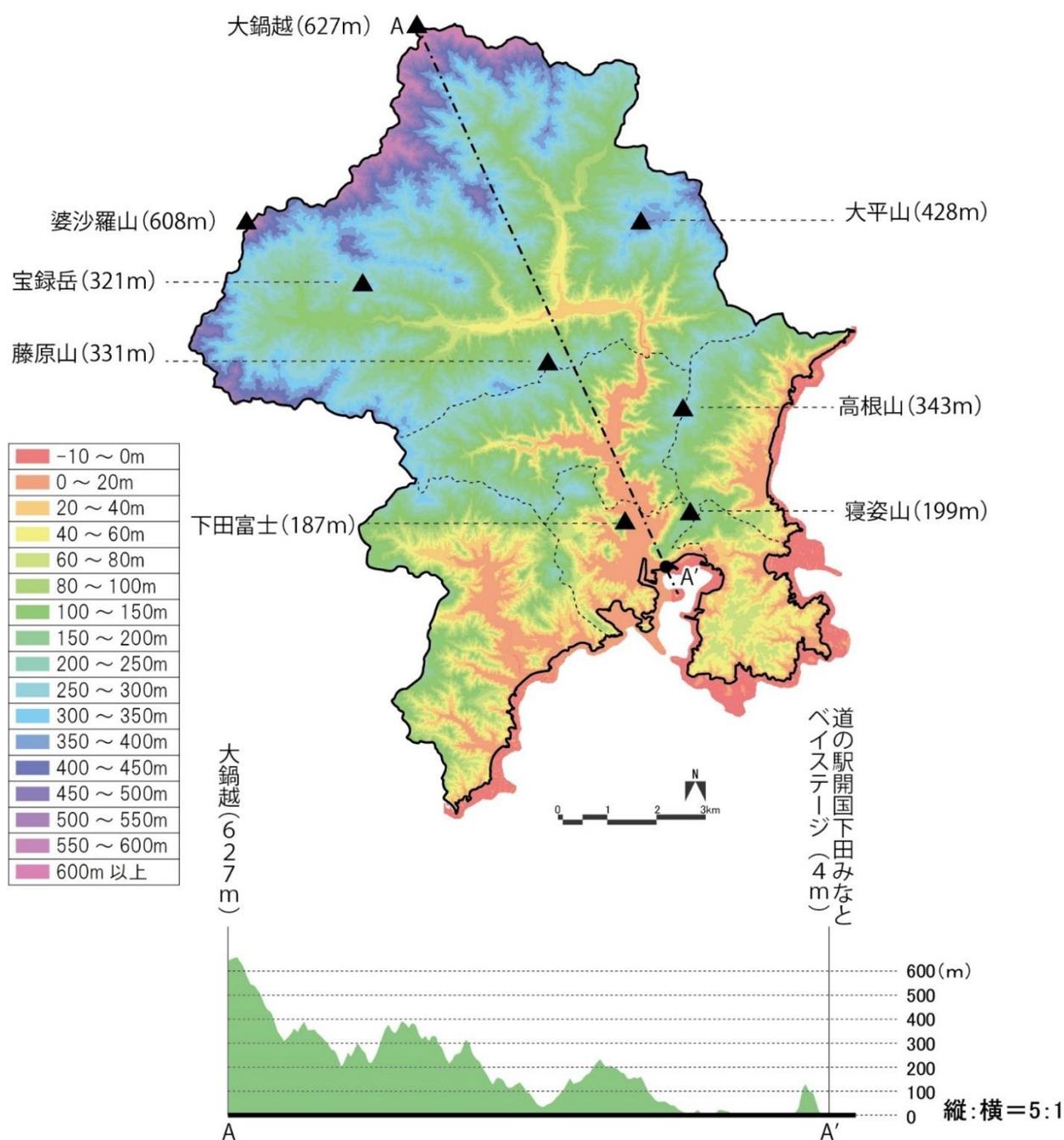
地形分類図

※1 川より高く平らな形で残った平坦面（段丘面）と削られてできた崖（段丘崖）からなる階段状の地形。

※2 上流部から運ばれた土砂が堆積し、山地の間を埋めた比較的幅の広い平坦な土地。

標高は、北西部の市境が最も高く、600m以上あり、南部の下田湾周辺に広がる市街地は3 m程である。市域の標高差は600m以上に及ぶ。

下田港の背後にそびえたつ下田富士(187m)と寝姿山(199m)は、はるか昔に活動を終えた海底火山が伊豆と本州の衝突とともに隆起・浸食され、火山の中心にあったマグマの通り道が姿を現したもの(火山の根)で、特異な地形を有している。

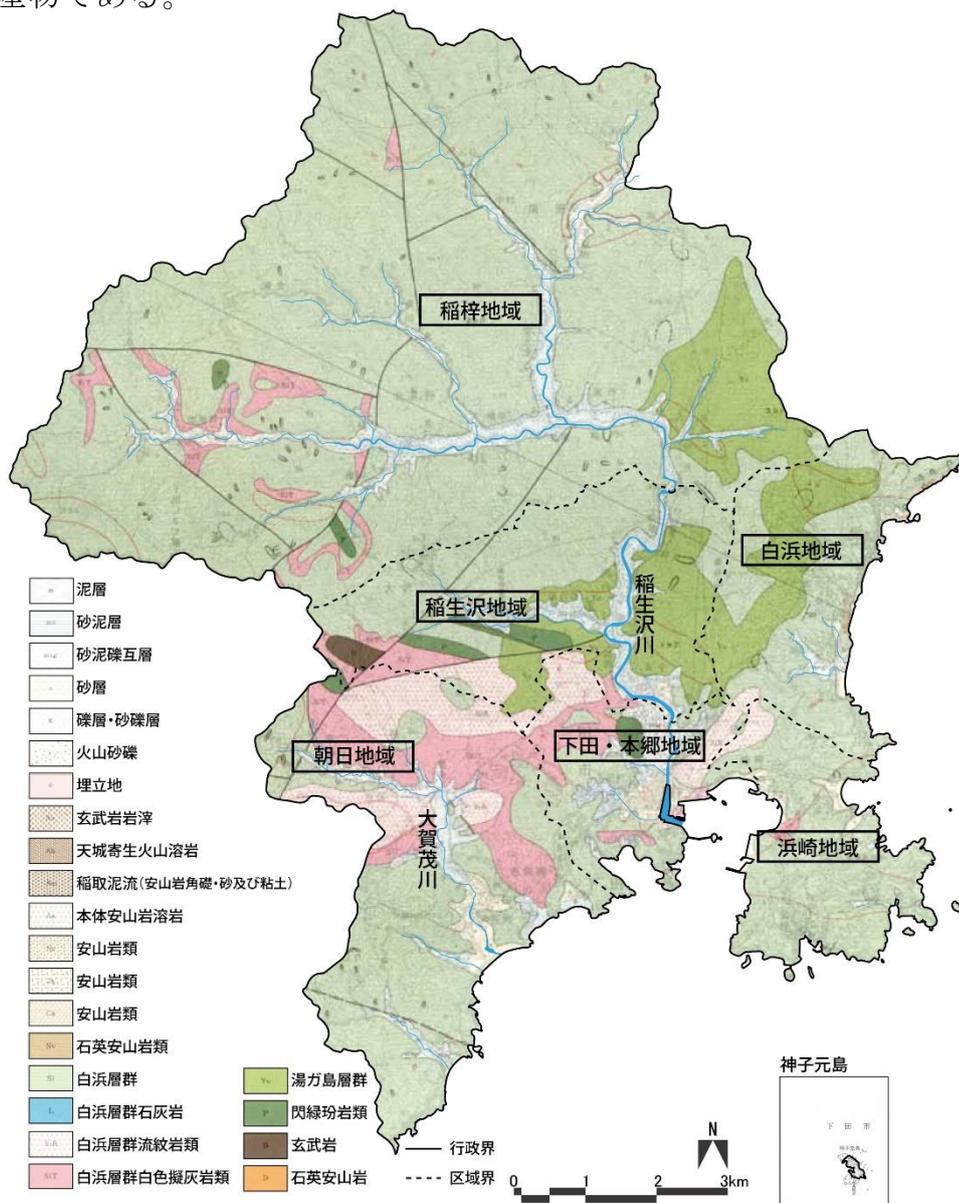


標高図と標高断面図

②地質

地質は、伊豆半島が海底火山であった時代の火山性堆積物から成る白浜層群や湯ガ島層群が大部分を占めており、稲生沢川や大賀茂川等の河川沿岸流域には、泥層から礫層・砂礫層までの未固結堆積物が分布し、沖積平野^{※3}を形成している。

伊豆半島南部で採掘される「伊豆石」は、火山灰や軽石が降り積もった火山性堆積物が長い年月をかけて凝灰岩へと変化したものであり、この特異な地質の産物である。



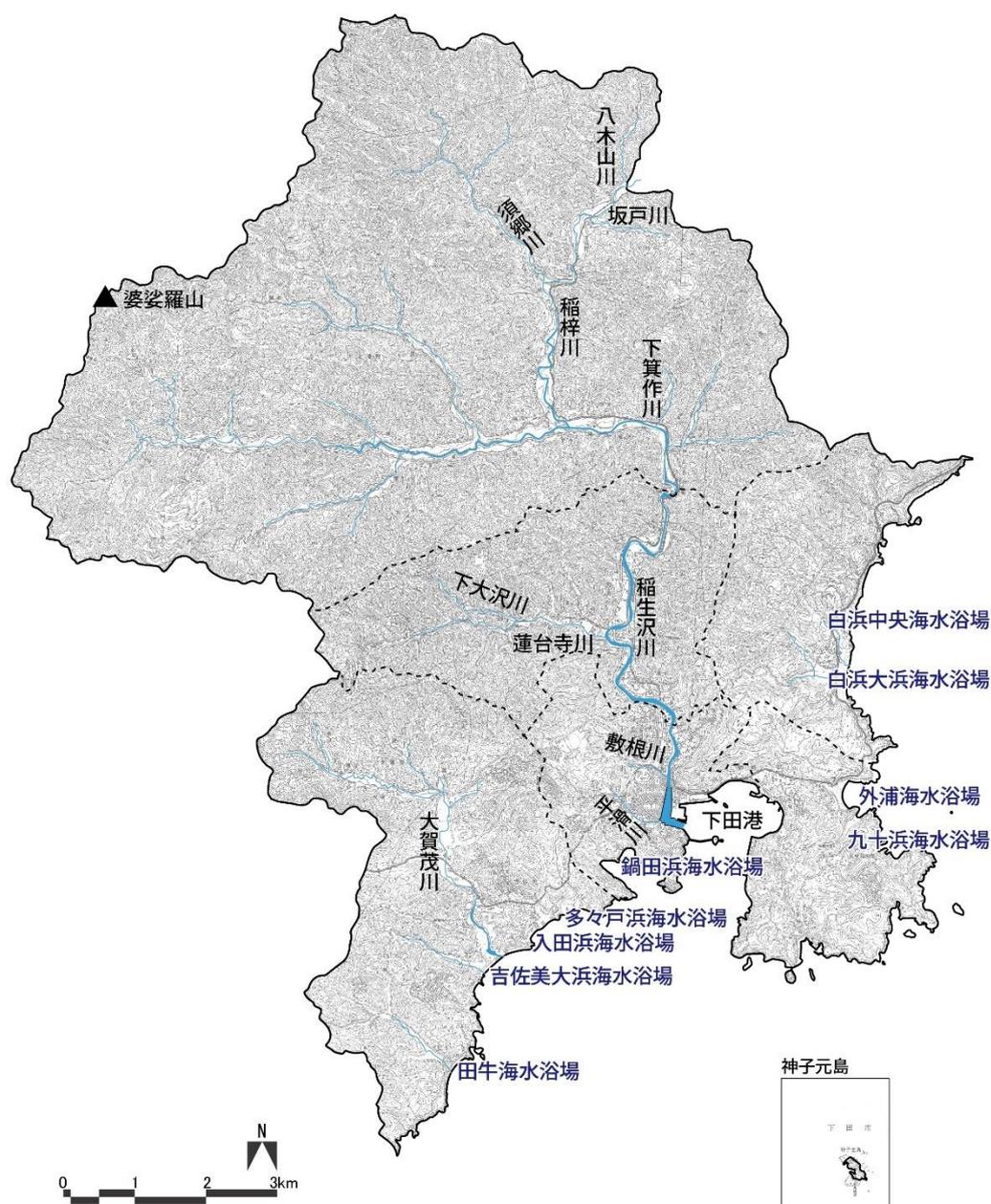
表層地質図

※3 河川による侵食や土砂の運搬・堆積などの作用によって形成される平野の一種。

③水質

市域を流れる代表的な河川は、稲生沢川である。稲生沢川は、下田市加増野の婆娑羅山（標高 608m）に源を発し、支川と合流しながら市域をほぼ真東に貫き、稲梓川と合流した後に進路をほぼ真南に変え、蓮台寺川等と合流して下田港へ注いでいる。

また、9つの海水浴場があり、環境省が定める水質基準において最高ランクの水質を誇っている。



河川等位置図

<コラム1 下田市のジオサイト※4>

伊豆半島は、約2,000万年前、南洋の海底火山群であったものが、やがて本州に衝突し、現在のような半島の形になった。

その後もプレートによる地殻変動、火山活動が続き、二重三重の地質学的特異性は、美しい景観や温泉、深い海など、独特の自然環境を生み出した。

伊豆半島は、その特異な成り立ちと地学的な現状から、「伊豆半島ジオパーク」として、平成24年(2012)に日本ジオパーク※5に認定され、平成30年(2018)にユネスコの世界ジオパークに認定された。

下田市では、つめき ぎきたわらいそ 爪木崎俵磯の柱状節理やちかくへんどう 柿崎弁天島の斜交層理、りゅうぐうくつ 田牛の龍宮窟、えびすじま 恵比須島などを始めとするジオパークのダイナミックな景観を見ることができる。



主なジオサイトポイント

※4 地質、地形、歴史などそのジオパークを特色づける見学場所や拠点。(例：地形の景観、岩石や化石が見られる崖、歴史建造物、植物の群生地など)

※5 「地球・大地 (ジオ: Geo)」と「公園 (パーク: Park)」とを組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味し、地球 (ジオ) を学び、丸ごと楽しむことができる場所をいう。日本ジオパークは43地域あり、その内9地域がユネスコ世界ジオパークに認定されている。

(出典：日本ジオパークネットワーク 平成30年(2018)4月時点)



① 爪木崎西

爪木崎西側の海岸には、「俵磯」と呼ばれる珍しい岩石が見られる。岩石は「柱状節理」といわれる六角形の柱が整然と積み重ねられてできている。マグマや溶岩が冷え固まる時に体積が縮むため、このような形が生まれる。水を抜いた田んぼや、泥の中にできた水たまりが乾燥したときにできる亀裂とよく似ている。



② 恵比須島

恵比須島を一周する遊歩道から、軽石や火山灰が作る美しい縞模様など、太古の海底火山の名残が見られる。地殻変動によって少し傾いた地層は、遊歩道に沿って次々と姿を変える。島のまわりにある「千畳敷」(岩盤からなる広い台地状の地形)は、現在も続いている地殻変動の証拠でもある。



③ 柿崎弁天島

柿崎弁天島では斜めに交差する美しい縞模様の地層が見られ、「斜交層理」と呼ばれる。海底火山から噴出した火山灰や軽石が、波や海流に運ばれて地層ができ、その後地殻変動によって隆起し、さらに波に削られてできたのが弁天島である。



④ 下田富士

下田富士は、はるか昔に活動を終えた海底火山が伊豆と本州の衝突とともに隆起、浸食され、火山の中心にあったマグマの通り道が姿を現したものである。登山道には女人禁制と書かれた石碑があるなど、信仰の面影が残る。



⑤ 龍宮窟

田牛の龍宮窟は、大きな洞窟の天井が一部崩れて、直径50mほどの天窓が開いたもので、伊豆の各地にあるものの中でも最大級である。洞窟の壁には、海底火山から噴出した黄色がかった茶色い火山れきが美しく層をなし、天窓の底を満たす青い海水とのコントラストが神秘的な場所である。

＜コラム2 伊豆石と石丁場跡＞

下田市のまちなみの中には、地元産石材の伊豆石を用いた建造物が多く残っており、伊豆石は、建造物の基礎や石蔵、石塀だけでなく、石灯籠や記念碑など様々な所で伊豆石が利用されている。

伊豆石には2種類あり、火山から流れ出した溶岩の「堅石」と、火山が噴出した火山灰や軽石からなる凝灰岩と呼ばれる「軟石」に大別され、特に軟石は加工がしやすいのが特徴である。

下田を含む伊豆半島南部は、海底火山の火山灰や軽石からなる地質が多くを占めるため、伊豆軟石の採掘が盛んに行われ、広く利用された。

近世後期から明治にかけて、下田における石材生産は、住民の多くが関わった花形産業であった。

伊豆石は扱いやすく、加工しやすい建築材料として重宝され、現在でも、ペリーロード周辺では、こうした軟石を使った建物が趣ある店舗などに活用されている。



草画房（店舗）



伊豆石の蔵

下田市域内には、石丁場跡（石を山などから切り出した跡）が多数残されている。採掘形状は様々で、トンネル状のもの、複数の部屋状の空間がつくられているもの、また、かなり大規模で広大な空間がつくられているものなどがある。

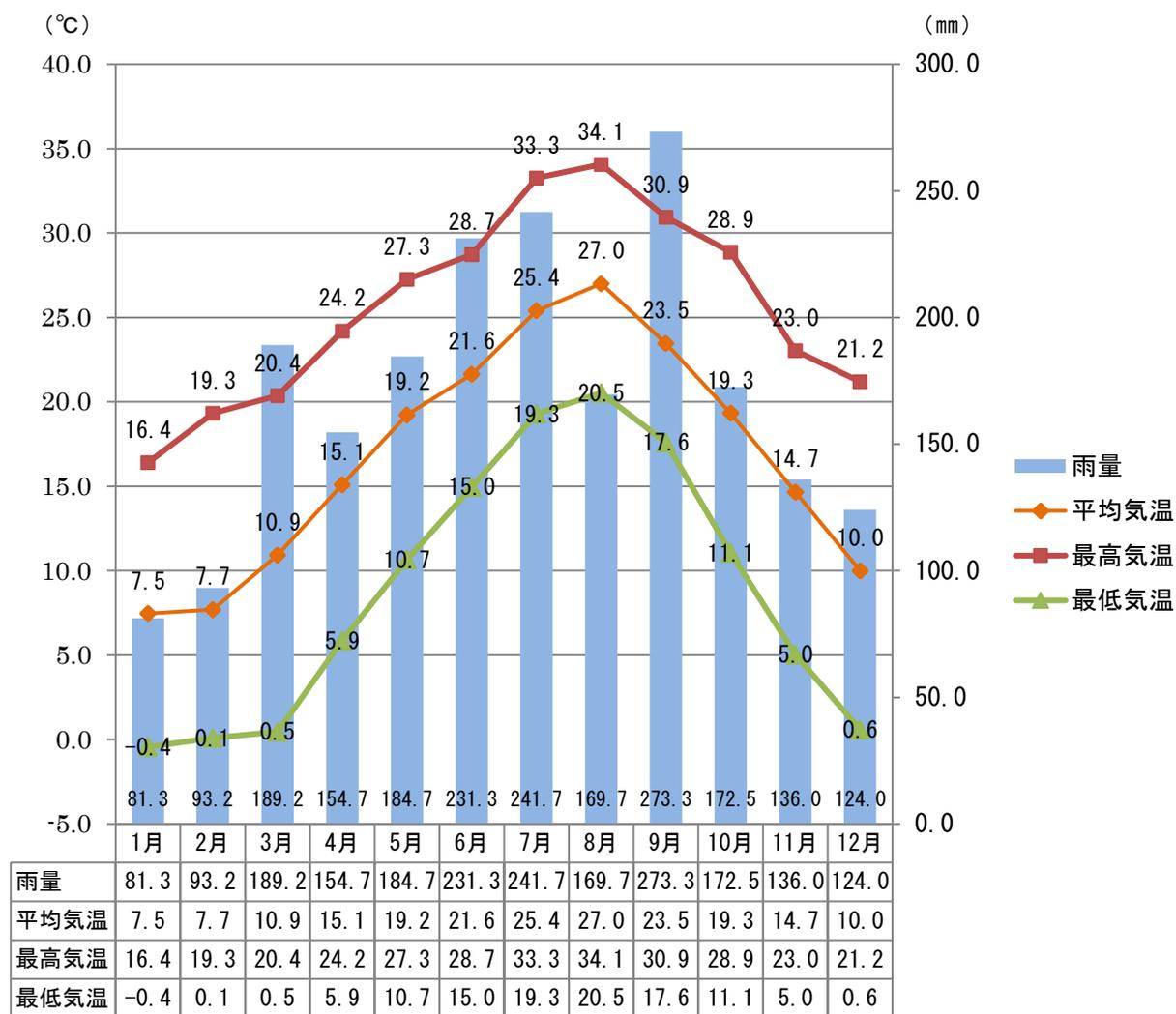


敷根の石丁場跡

(3) 気象

下田市は、黒潮が流れる太平洋に面しているため、年平均気温は約 17℃と比較的温暖的な気候で、真冬でも降雪はほとんどない。最も乾燥した月は1月で 81.3mm、最も降水量が高いのが9月で 273.3mm、年間降水量は 2,051.5mmと豊富である。

このような気候と地形条件により、様々な草花や果樹が生育している。

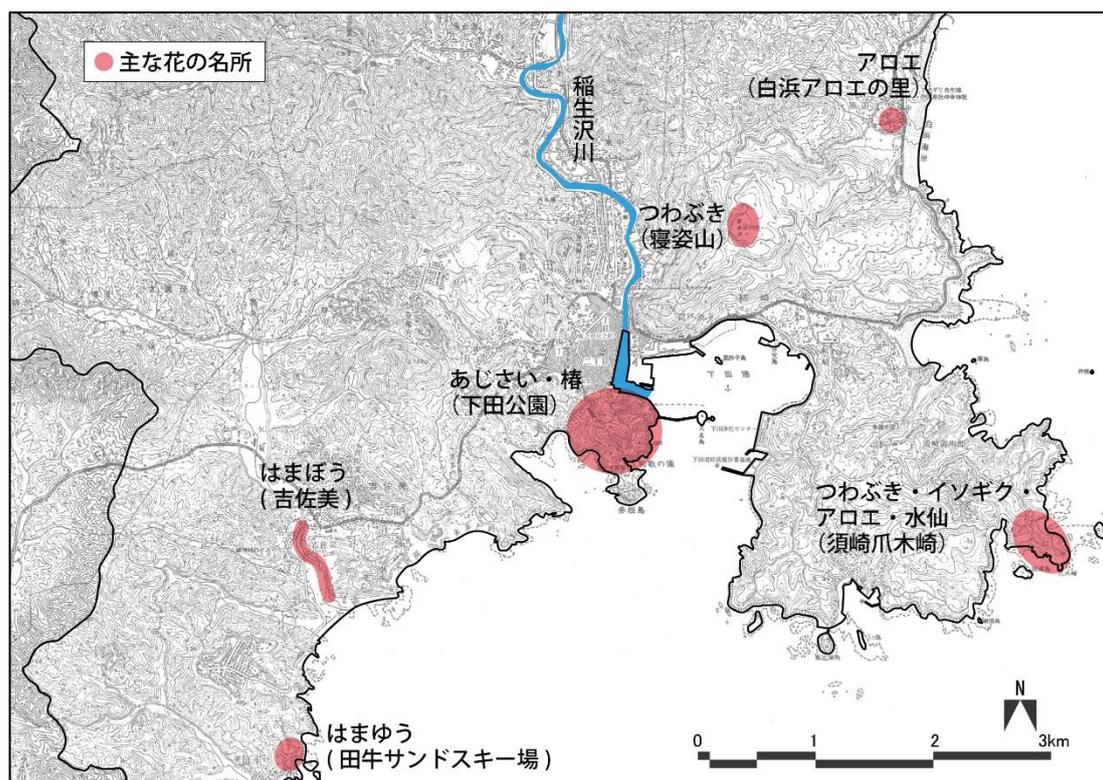


月別気象状況

(平成 26 年 (2014) ~平成 28 年 (2016) の過去 3 年間の平均)

<コラム3 下田市の花>

下田市には、多様な草花がみられ、須崎半島先端の景勝地、爪木崎には、野水仙の一大群生地があり、毎年12月から2月にかけて「水仙まつり」が行われている。下田公園には、約15万株のあじさいが植えられ、6月に約300万輪が咲き乱れる「あじさい祭」が開催されるとともに、下田公園の椿園では12月から2月末にかけて、161種5,000本の椿の花々が咲き誇る。



主な花の名所



あじさい (下田公園)



椿 (下田公園)



はまぼう (吉佐美)



はまゆう (田牛サンドスキー場等)



つわぶき (寝姿山、須崎爪木崎他)



イソギク (須崎爪木崎)



アロエ (白浜アロエの里、須崎爪木崎)



水仙 (須崎爪木崎)

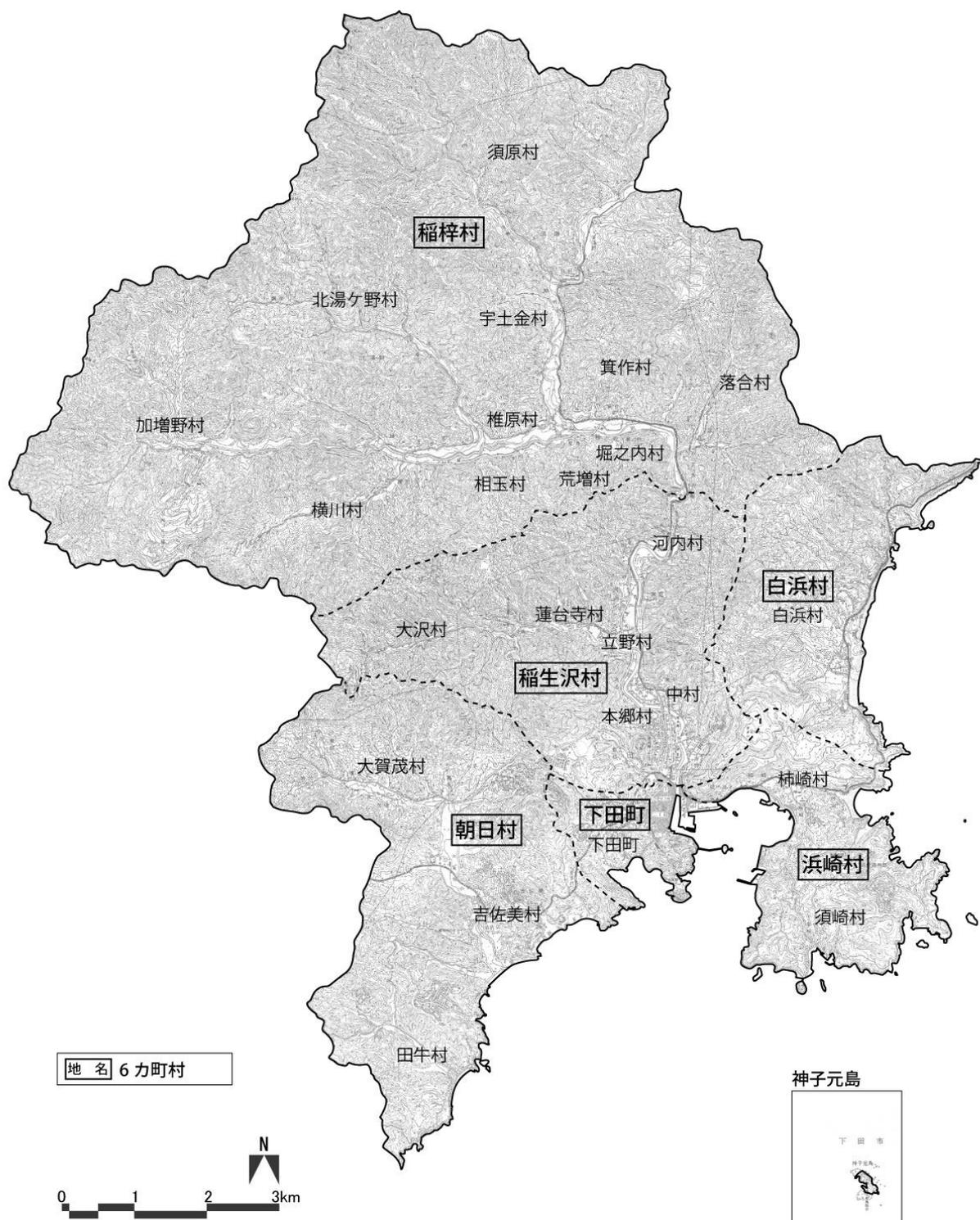
2 社会的環境

(1) 下田市の変遷

下田市は、昭和30年(1955)に賀茂郡^{かも}下田町、稲梓村^{いなずさ}、稲生沢村^{いのうざわ}、白浜村、浜崎村、朝日村の6カ町村が合併して下田町となり、昭和46年(1971)に市制を施行して、現在に至っている。

明治以降町村合併変遷表

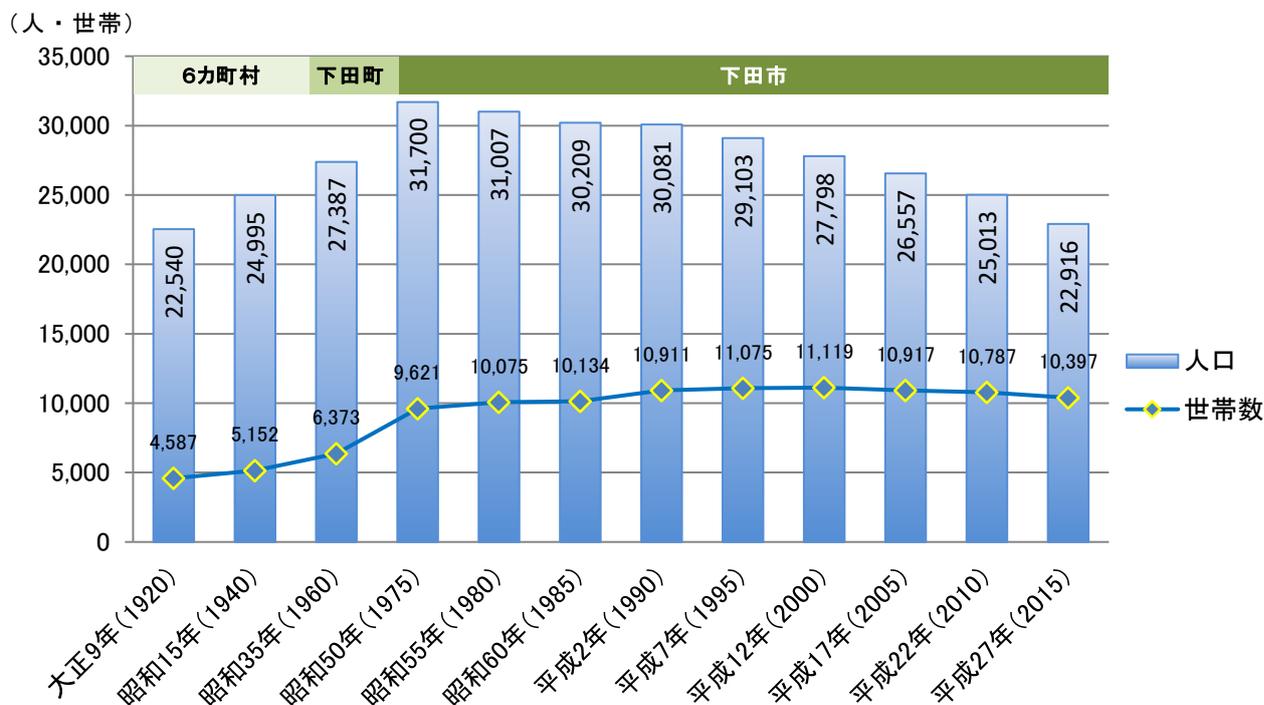
| 明治4年 町村名 | 合併 | 明治22年町村名 | | その後合併等 | |
|-------------|----------------|----------|------|----------------|--|
| | | 合併前 | 合併後 | | |
| 下田町 | 明治8年合併 下田町 | 下田町 | 下田町 | 明治29年 白浜村分離 | |
| 岡方村 | | 柿崎村 | | | |
| 柿崎村 | 明治7年合併 大賀茂村 | 須崎村 | 浜崎村 | | |
| 須崎村 | | 白浜村 | | | |
| 白浜村 | | 吉佐美村 | 朝日村 | | |
| 吉佐美村 | | 大賀茂村 | | | |
| 上大賀茂村 | 明治10年合併 須原村 | 田牛村 | 稲梓村 | | |
| 下大賀茂村 | | 箕作村 | | | |
| 田牛村 | | 須原村 | | | |
| 箕作村 | | 落合村 | | | |
| 北野沢村 | 明治8年合併 大沢村 | 宇土金村 | 稲生沢村 | | 下田町 昭和30 年合併 下田市 昭和46 年成立 |
| 茅原野村 | | 椎原村 | | | |
| 新須郷村 | | 加増野村 | | | |
| 本須郷村 | | 横川村 | | | |
| 落合村 | | 相玉村 | | | |
| 宇土金村 | | 北湯ヶ野村 | | | |
| 椎原村 | | 堀ノ内村 | | | |
| 加増野村 | | 荒増村 | | | |
| 横川村 | | 立野村 | | | |
| 相玉村 | | 大沢村 | | | |
| 北湯ヶ野村 | 蓮台寺村 | 稲生沢村 | | | |
| 堀ノ内村 | 河内村 | | | | |
| 荒増村 | 中村 | | | | |
| 立野村 | 本郷村 | | | | |
| 上大沢村 | 明治8年合併 大沢村 | 蓮台寺村 | 稲生沢村 | | |
| 下大沢村 | | 河内村 | | | |
| 蓮台寺村 | | 中村 | | | |
| 河内村 | | 本郷村 | | | |
| 中村 | | | | | |
| 本郷村 | | | | | |



明治22年合併前の町村名と合併後の6カ町村

(2) 人口動態

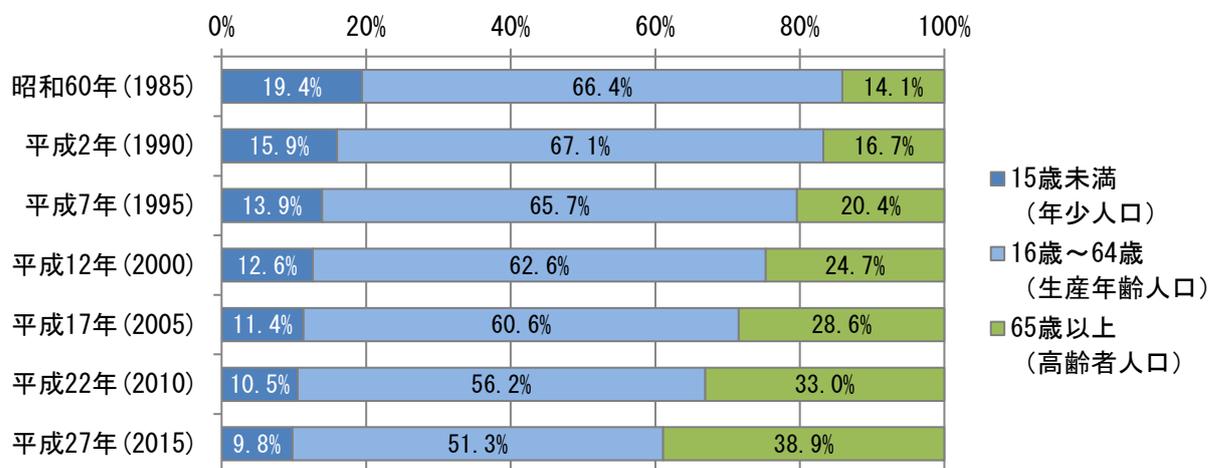
人口は、昭和50年(1975)の31,700人をピークに減少し、世帯数も平成12年(2000)以降減少に転じている。平成27年(2015)の人口は22,916人、世帯数は10,397世帯となっている。



総人口の推移

(資料：下田市将来人口ビジョン、平成27年度は国勢調査)

平成27年(2015)の年齢別人口は、年少人口が2,234人(9.8%)、生産年齢人口が11,658人(51.3%)、高齢者人口が8,848人(38.9%)であり、少子高齢化が急速に進展している。

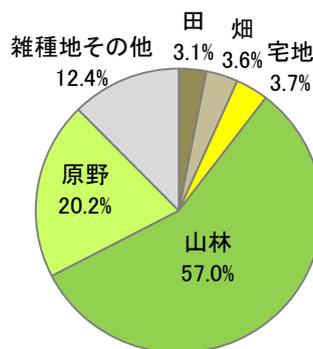


人口構成比の推移

(資料：各年国勢調査)

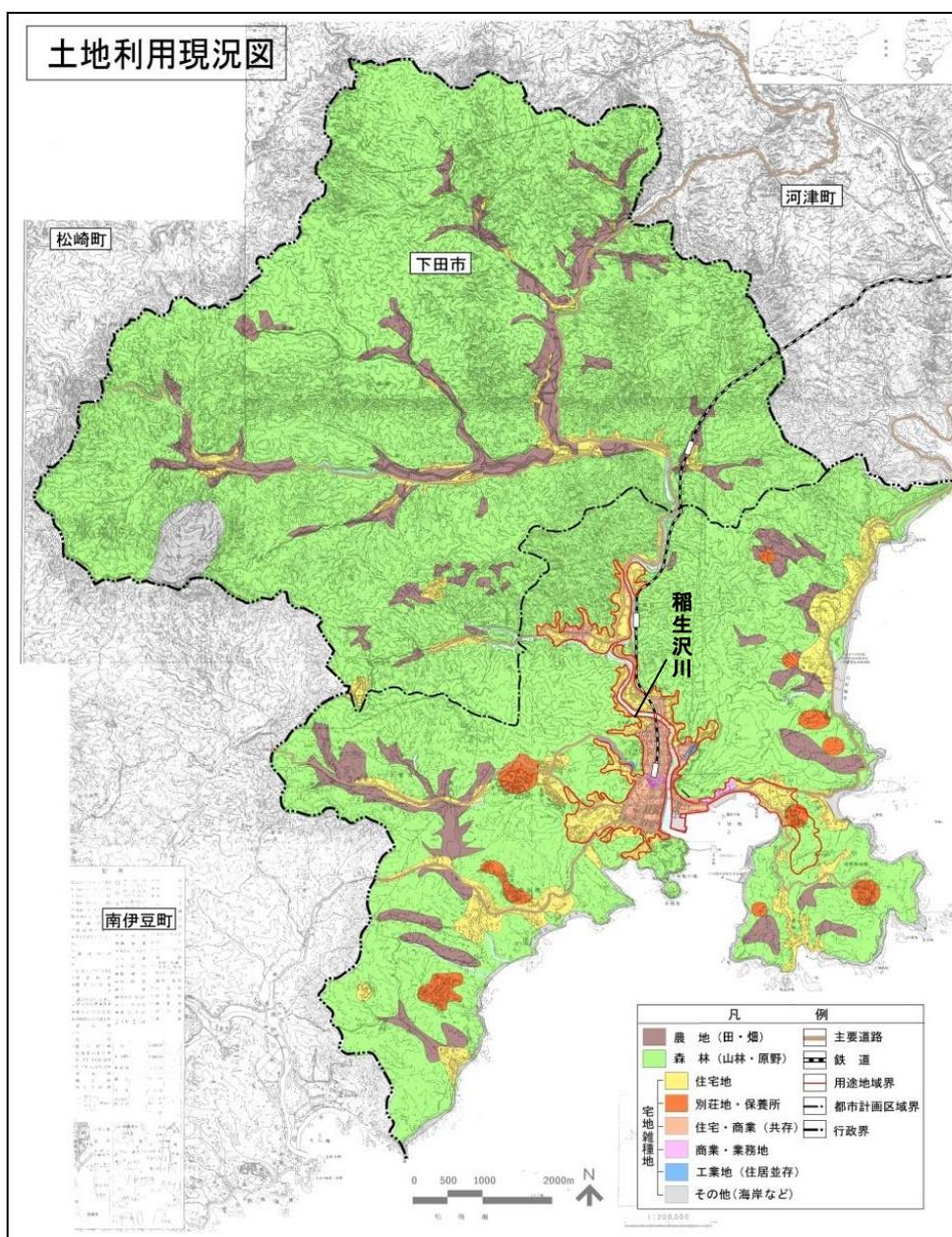
(3) 土地利用

下田市の面積は、104.38 km²で、総面積の約 8 割を森林（山林・原野）が占めている。農地や宅地は河川沿いの平坦地や丘陵地に分布しており、稲生沢川の下流の平坦地には、市街地が形成されている。



平成 28 年度地目別土地利用状況

(資料：平成 28 年度下田市統計書)



土地利用現況図

(資料：下田市都市計画マスタープラン)

(4) 交通機関

下田市は伊豆半島のほぼ先端部にある良港として、古くから東西海上交通の要衝であり、幕末期は西洋に開かれた開港場として幕末開港史にその名を留めている。

近代に至り、東京方面と南伊豆地方を結ぶ物流拠点として発展したが、やがて船舶装備の近代化等によって港としての優位性は薄れ、昭和初年の経済恐慌によって町の経済は低迷した。

しかし、昭和36年(1961)には伊豆急行線が開通し、伊豆急下田駅は伊豆半島の終着駅となった。鉄道によって首都圏と結ばれ、自動車の普及による道路整備とがあいまって観光客数は急増し、観光産業が発展した。

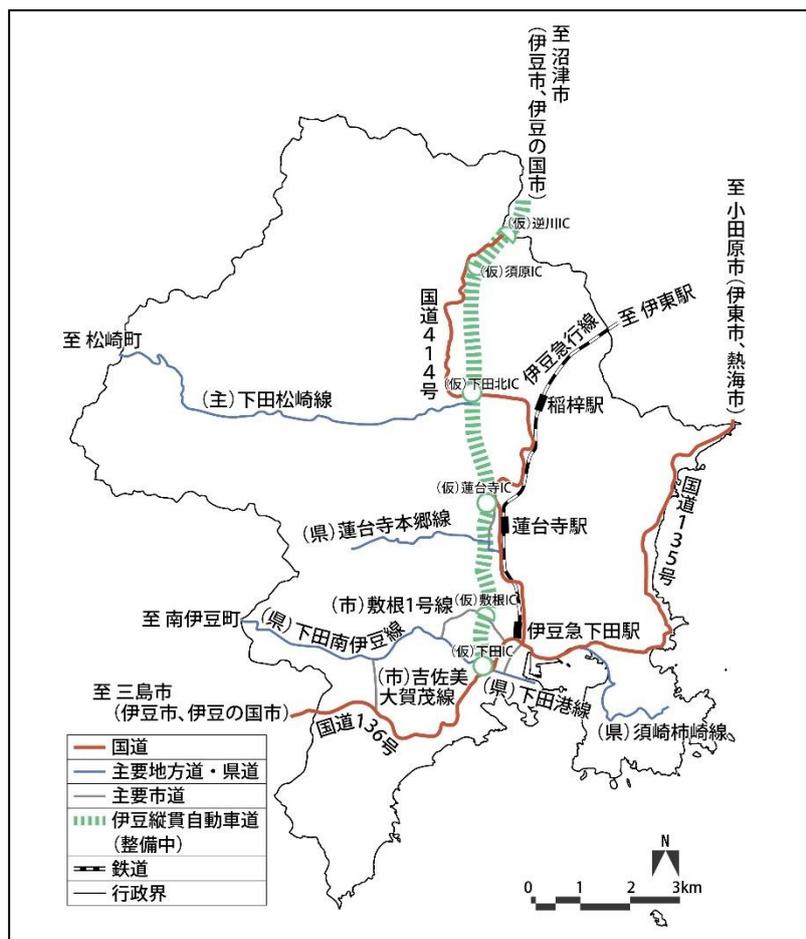
本市には、伊豆急行線の伊豆急下田駅、蓮台寺駅、稲梓駅の3駅が設置されている。



伊豆急行 リゾート21
(黒船電車)

道路は、東海岸を通る国道135号、半島の中心を貫く国道414号、西海岸を通る国道136号の3本の国道が整備されている。

現在、東名高速道路沼津ICと下田を60分で結ぶ高規格幹線道路「伊豆縦貫自動車道」の整備が進められており、下田市内の混雑の緩和を図ることにより、観光産業の活性化と、日常生活を快適にすることを目的としている。



下田市内の主な道路網・鉄道

また、下田港からは、伊豆七島（新島、式根島、神津島、利島）を結ぶ定期航路が運航されている。

| 各島の距離と時間 | | | |
|----------|---|-----|--------------|
| 下田 | — | 利島 | 37km 約1時間35分 |
| 利島 | — | 新島 | 16km 約1時間 |
| 新島 | — | 式根島 | 8km 約20分 |
| 式根島 | — | 神津島 | 17km 約50分 |
| 神津島 | — | 下田 | 55km 約2時間20分 |



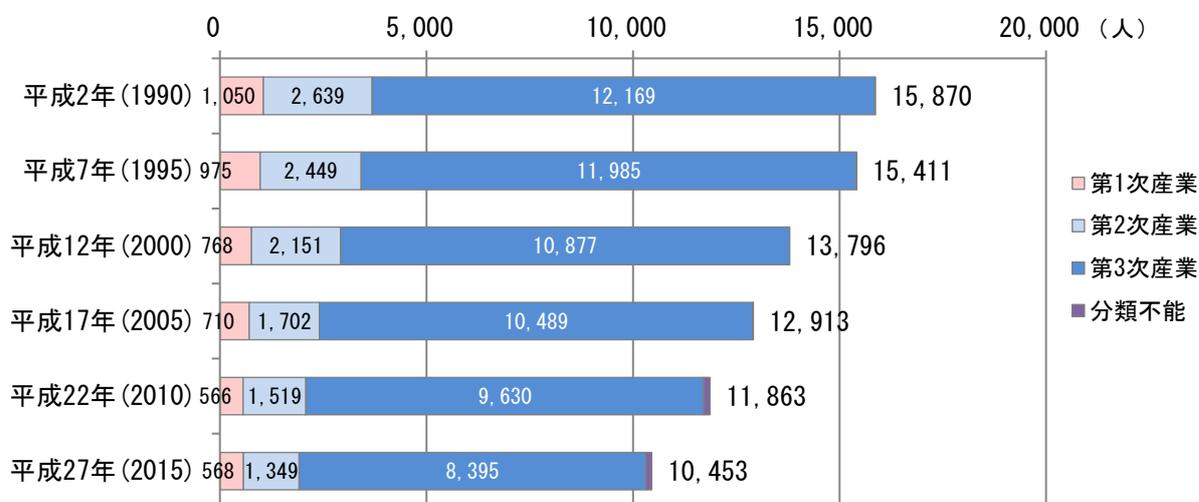
定期航路図

(5) 産業

平成27年（2015）における就業者数は10,453人であり、平成2年（1990）の15,870人から34%減少している。

平成27年（2015）における産業3分類別は、農林水産業を主とした第1次産業は568人（5.4%）、製造業、建設業を主とした第2次産業は1,349人（12.9%）、商業・サービス業を主とした第3次産業就業者は8,395人（80.3%）となっている。（カッコ内は全就業者数に対する比率を表す。）

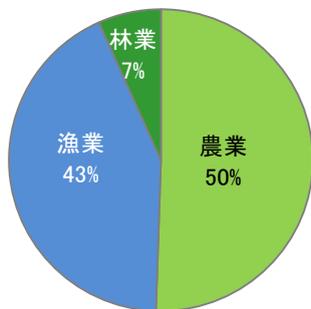
3分類とも減少傾向となっている中で、元々高い水準である第3次産業の比率が更に高くなる傾向にある。



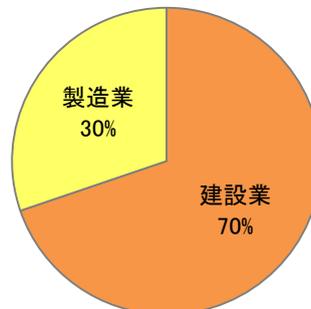
産業別就業割合の推移

（資料：各年国勢調査）

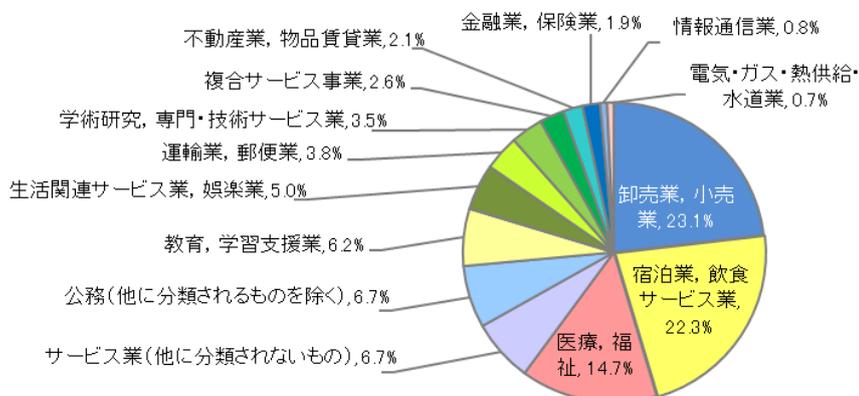
平成27年（2015）における第1次産業就業者、2次産業就業者、第3次産業就業者の内訳は次の通りである。



平成27年第1次産業の内訳



平成27年第2次産業の内訳



平成27年第3次産業の内訳

（資料：平成28年度下田市統計書）

①漁業

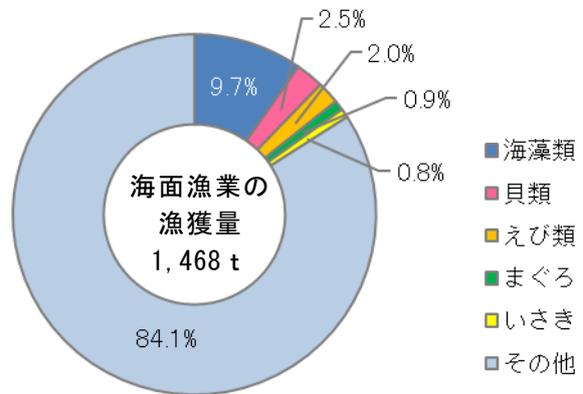
下田市は、せんかいいそね浅海磯根漁業^{※6}が盛んであり、特に海藻類は収穫量が多く、静岡県内においても24.4%のシェアを誇っている。この海藻類の中には、下田の特産品である天草が含まれている。天草の水揚量は、後継者不足等により減少傾向にあり、現在、水揚げがあるのは、白浜漁港、須崎漁港、外浦漁港である。

魚類は、キンメダイが下田の特産品である。キンメダイは、主に一都四県（東京都、千葉県、神奈川県、静岡県、高知県）で漁獲されることから、農林水産省による漁獲量調査の対象外となっているが、平成29年度魚種別系群資源評価（水産庁）による各都県のキンメダイ漁獲量や漁業協同組合所有のデータによると、下田港の漁獲量は1,000トン以上と、全国シェアの約2割を占め、日本一を誇っている。

※6 アワビ、トコブシ、サザエなどの貝類、イセエビ、ウニ類、天草、岩海苔などの採藻により収入を得る浅い海での魚類以外の漁業。

平成28年(2016)海面漁業※7の魚種別漁獲量(うち上位10種)と静岡県内シェア

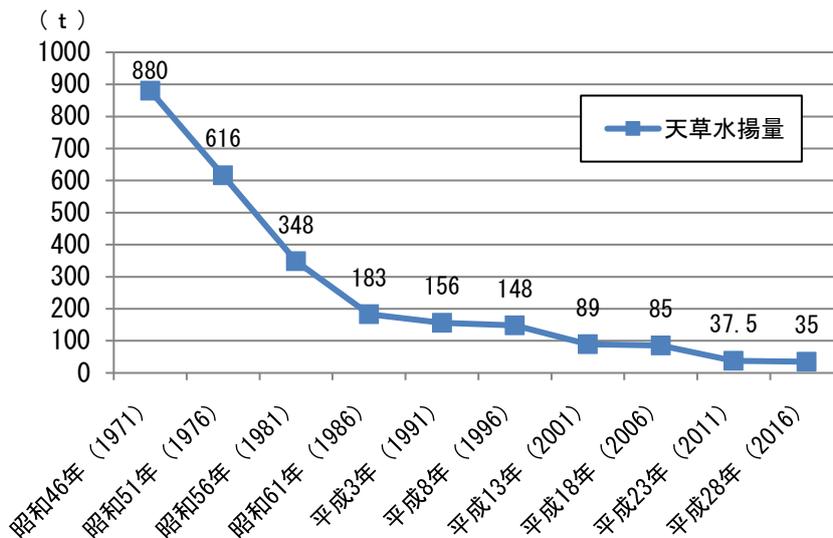
| | 魚種 | 漁獲量 | 静岡県内シェア |
|-------|------|---------|---------|
| 1 | 海藻類 | 142 t | (24.4%) |
| 2 | 貝類 | 37 t | (1.7%) |
| 3 | えび類 | 30 t | (2.1%) |
| 4 | まぐろ類 | 13 t | (0.0%) |
| 5 | いさき | 12 t | (9.4%) |
| 6 | かつお類 | 4 t | (0.0%) |
| 7 | かじき類 | 3 t | (0.5%) |
| 8 | ぶり類 | 2 t | (0.2%) |
| 9 | あじ類 | 1 t | (0.1%) |
| 10 | さば類 | 1 t | (0.0%) |
| 漁獲量総計 | | 1,468 t | (0.8%) |



平成28年(2016)海面漁業の魚種別漁獲量の内訳割合

(資料: 農林水産省 海面漁業生産統計調査 平成28年市町村別データ)

※7 河川や湖などで行う漁業(内水面漁業)に対して、海洋で行う漁業。



漁港位置

天草水揚量の推移

各漁港の天草水揚量の推移

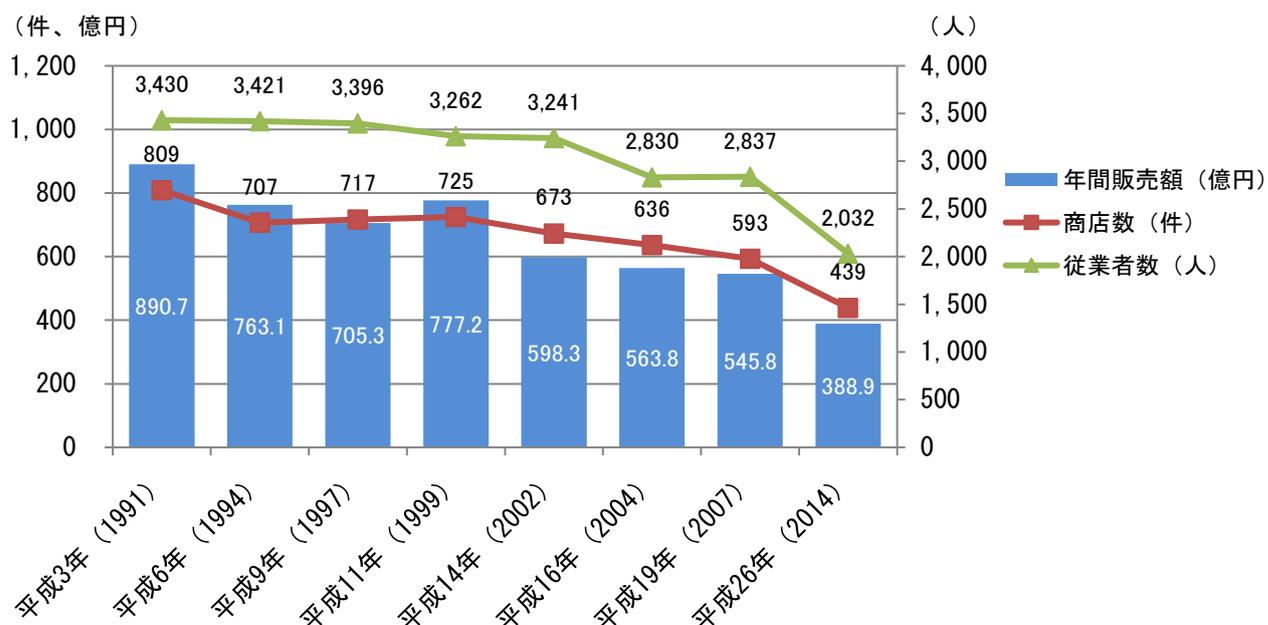
(単位: t)

| | 昭和46年(1971) | 昭和51年(1976) | 昭和56年(1981) | 昭和61年(1986) | 平成3年(1991) | 平成8年(1996) | 平成13年(2001) | 平成18年(2006) | 平成23年(2011) | 平成28年(2016) |
|------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 白浜港 | 502 | 110 | 108 | 51 | 53 | 56 | 14 | 16 | 8 | 10 |
| 外浦港 | 74 | 110 | 93 | 47 | 33 | 24 | 19 | 12 | 3 | 6 |
| 須崎港 | 254 | 348 | 118 | 71 | 57 | 60 | 55 | 55 | 26 | 19 |
| 吉佐美港 | 2 | 3 | 3 | 1 | 0.2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 田牛港 | 17 | 5 | 1 | 1 | 0.8 | 4 | 1 | 1 | 0.5 | 0 |
| 下田港 | 31 | 40 | 25 | 12 | 12 | 4 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 合計 | 880 | 616 | 348 | 183 | 156 | 148 | 89 | 85 | 37.5 | 35 |

(資料: 伊豆漁業協同組合統計書)

②商業

平成26年(2014)の卸売・小売業の商店数は439件、従業者数は2,032人、年間販売額は388億9千万円であり、従業者数については平成16年(2004)から平成19年(2007)にかけて横ばいであったが、全体的には減少傾向が続いている。



卸売・小売業の推移

(資料：各年度下田市統計書)

③観光

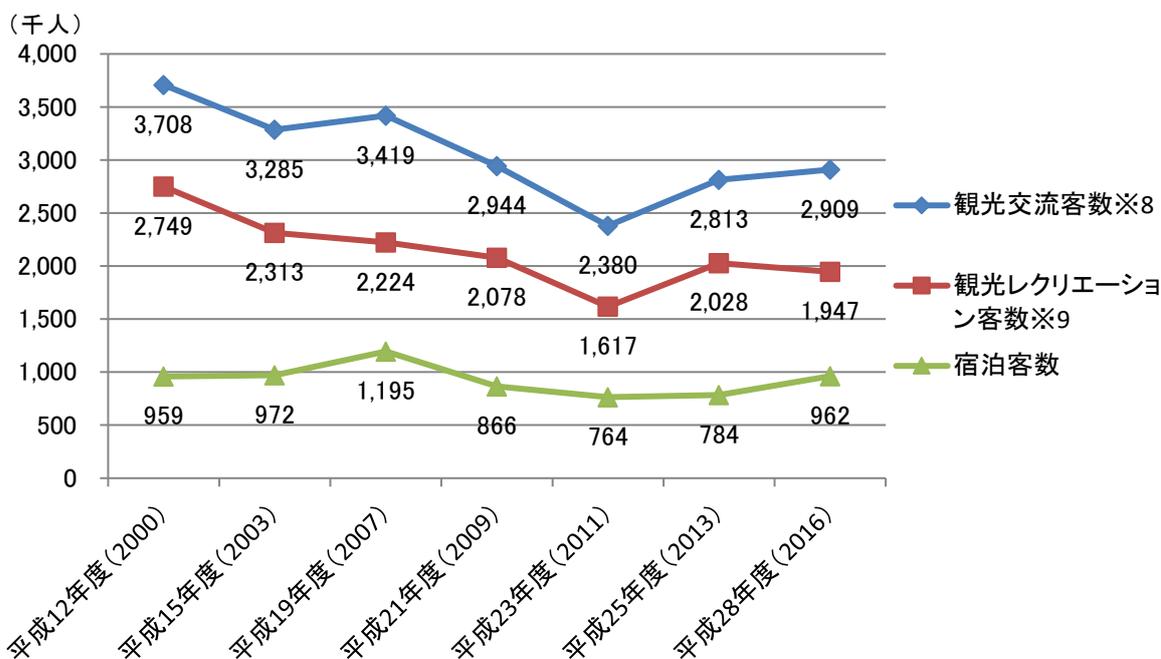
下田市の観光は、昭和初期に川端康成の『伊豆の踊子』などの小説の舞台となり注目され、その後、現東海汽船の客船就航や伊豆循環道路東海岸線の開通などにより多くの観光客が訪れるようになり、昭和36年(1961)の伊豆急行開通以降、観光客が急増し観光産業が盛んになった。

昭和49年(1974)以降、群発地震の多発や、台風や火山の噴火の影響などもあり、観光客が減少している。

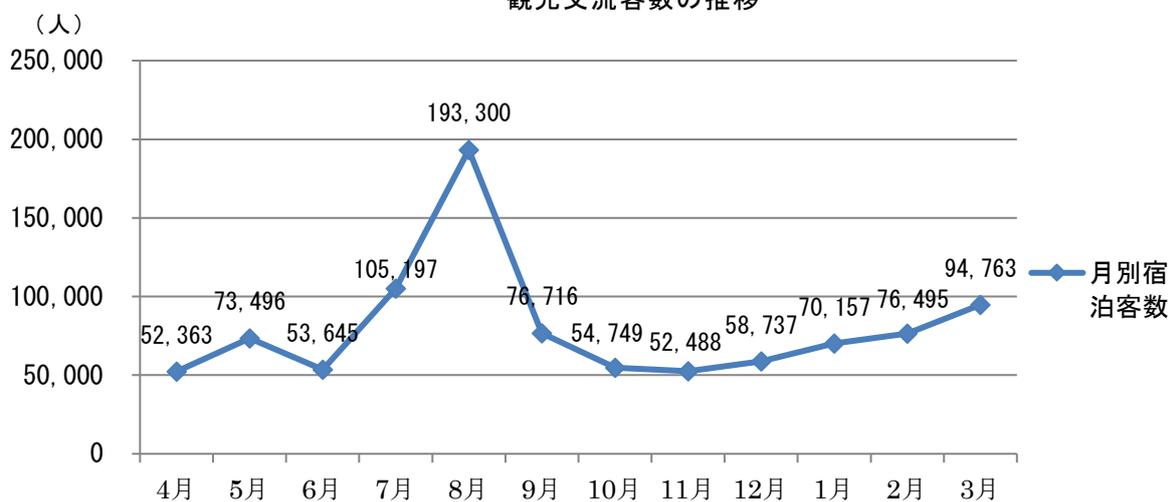
そのような状況の中で、平成29年(2017)7月には、東急電鉄と伊豆急行による新観光列車「THE ROYAL EXPRESS」が横浜～伊豆急下田で運行を開始している。

平成28年度(2016)の観光交流客数^{※8}は290万9千人であり、うち宿泊客数は96万2千人(33%)となっている。平成23年度(2011)は、東日本大震災による影響により、観光交流客数は238万人まで減少した。

宿泊客数は夏季が多く、7～8月の2か月間で全体の1/3を占めている。



観光交流客数の推移



平成28年度(2016)月別宿泊客数

(資料:平成28年度静岡県観光交流の動向)

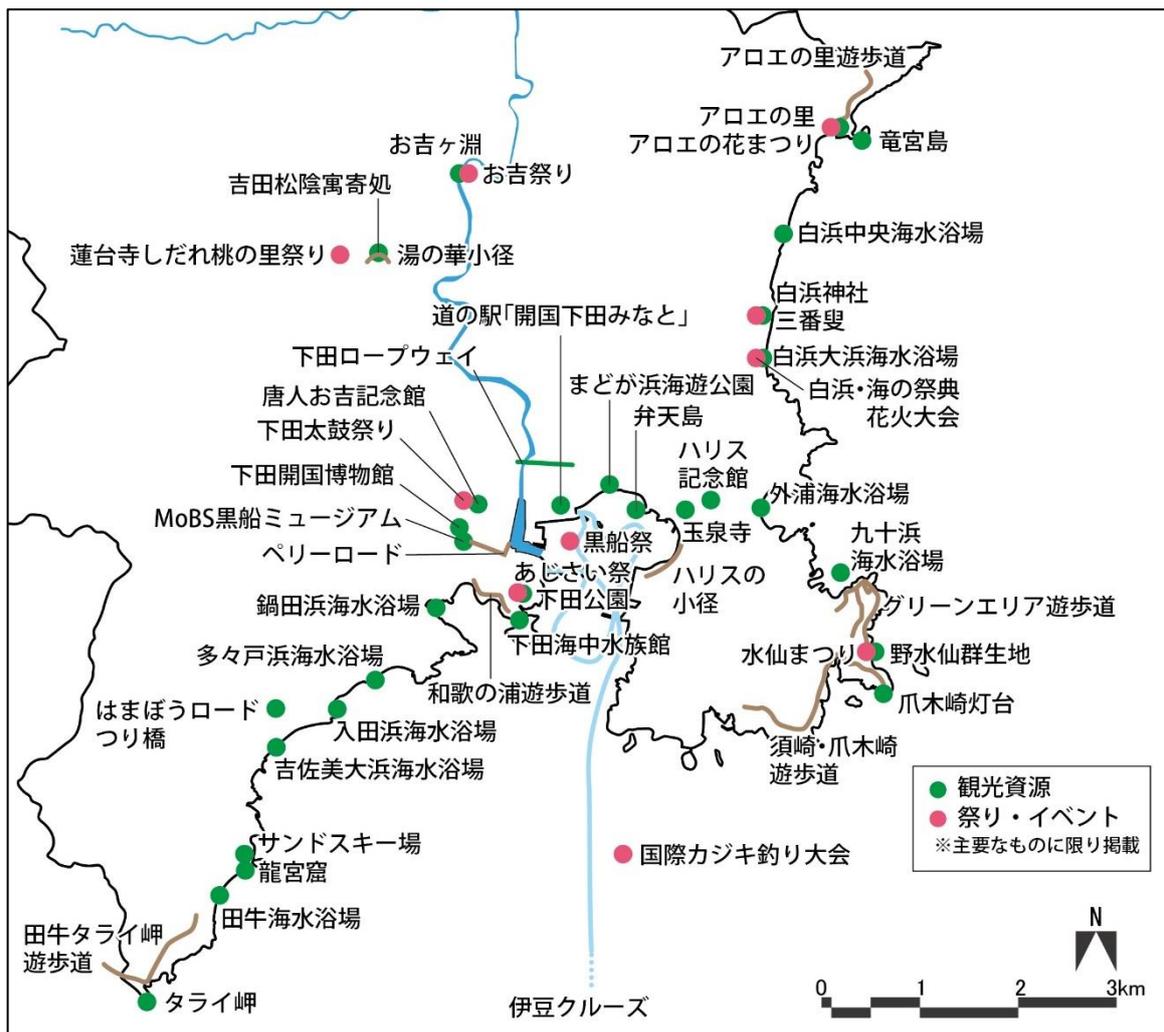
※8 観光交流客数は、市内の各地域を訪れた人の延べ人数とし、宿泊客数及び観光レクリエーション客数を合計したもの。

※9 観光レクリエーション客数は、観光施設(地点)、スポーツレクリエーション施設、行祭事及びイベント等への入場者・参加者等を集計したものであり、年間の入込客数が1千人以上のものが対象となる。

下田市は年間を通して多様な祭事・イベントがあり、特に水仙まつり、黒船くろふね祭、あじさい祭さい、下田太鼓祭りは、市内外から多くの人を訪れている。

下田市の祭事・イベント行事と来訪者数

| 開催期間 | | 行事名 | 開催場所 | 平成28年度 来訪者数(人) |
|------|------------------|-------------|-----------------|-----------------------------|
| 1月 | 12月～2月10日 | 水仙まつり | 爪木崎 | 200,000 |
| 2月 | 11日 | 鬼射祭 | 高根白山神社 | 未集計 |
| 3月 | 中旬～4月上旬 | 蓮台寺しだれ桃の里祭り | 蓮台寺地区 | 未集計 |
| | 27日 | お吉祭り | お吉ヶ淵と 宝福寺 | 400 |
| 5月 | 第3土曜日を含む 金～日 | 黒船祭 | 下田港周辺 | 201,000 |
| 6月 | 1日～30日 | あじさい祭 | 下田公園 | 136,300 |
| | 1日～30日 | 下田きんめ祭り | 市内各所 | 未集計 |
| 7月 | 中旬 | 海開き | 下田市内の 海水浴場 | 826,138 ※平成28年度の 海水浴客 |
| | 中旬 | 国際カジキ釣り大会 | 下田港を基地 とする近海 | 1,800 |
| | 中旬 | 白浜海の祭典・花火大会 | 白浜大浜海岸 | 15,000 |
| 8月 | 14、15日 | 下田太鼓祭 | 旧下田町 | 150,000 |
| 10月 | 9月20日～ 12月20日 | 伊勢えびまつり | 市内各所 | 未集計 |
| | 29日 | 三番叟 | 白濱神社 | 未集計 |
| | 20日～ 11月末日 | 柿・みかん狩り | 大賀茂地区 | 300 |
| 12月 | 中旬～1月中旬 | アロエの花まつり | 白浜 | 1,859 |



下田市の観光資源



ペリーロード



下田公園 あじさい祭



白浜大浜海水浴場



伊豆クルーズ



蓮台寺しだれ桃の里祭り



爪木崎灯台

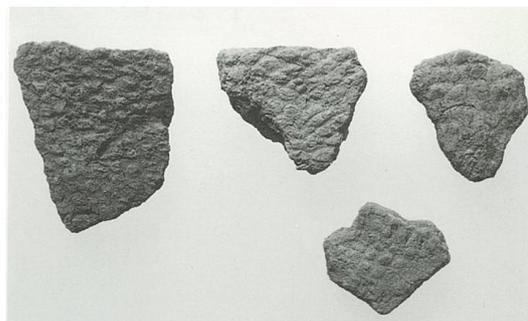
3 歴史的環境

(1) 歴史

①下田のあけぼの

ア 縄文・弥生時代

下田市で現在発見されている最も古い遺跡は、須崎の爪木崎遺跡や、田牛の上の原遺跡で代表される、縄文時代早期の土器を出土する遺跡で、いまからおおよそ7,000年前のものである。この時期の遺跡は海岸沿いにある階段状の台地に存在する例が多く、おそらく当時の人々の生活は、山地で狩猟を行う一方、それを補うため、海の魚介類を食糧として採取していたと考えられる。

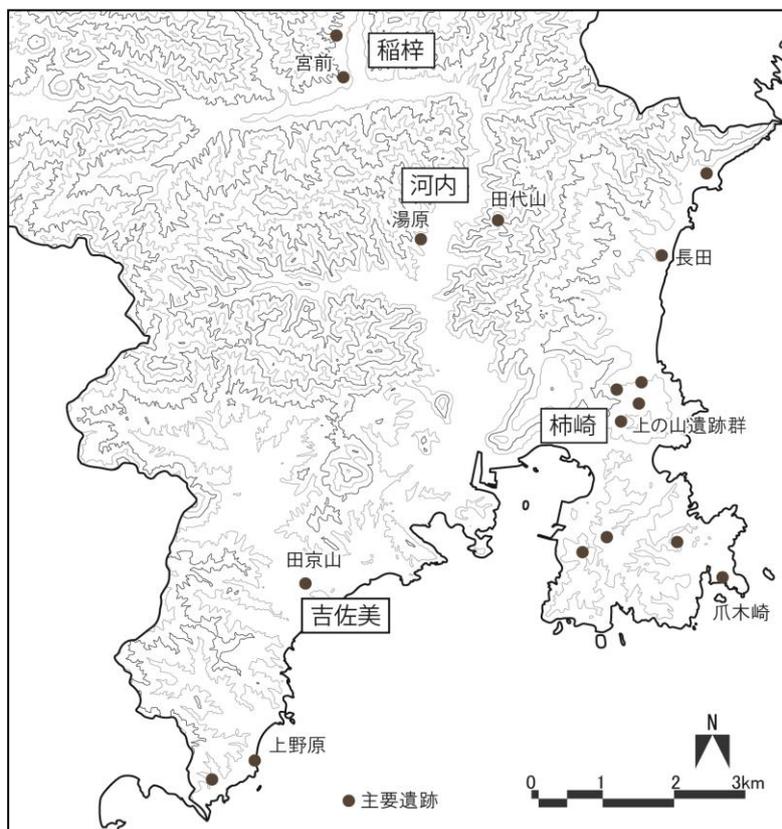


爪木崎遺跡出土の土器（縄文早期）

縄文時代の前期から中期（おおよそ5,000年前）になると、気候の温暖化によって海水面が上昇し、海岸線は現在よりもっと陸地の奥に入り込み、人々の住む集落もこれに伴い山側に移動したと考えられる。遺跡数は増え、吉佐美の田京山台地、柿崎の上の山台地、河内の湯原や稲梓の宮前のような山麓に、大きな集落が存在していたものと考えられる。

狩猟や漁撈の道具が発達し、落葉広葉樹林が広がったことで食物資源が増大し、人々の生活が次第に安定したことから、中期は人口も集落規模も拡大した。

中期を過ぎて、後期から晩期の時期になると気候が寒冷化しはじめ、貴重な食物資源である木の実など



縄文時代主要遺跡分布図

の不作が続き、人口の増加に伴って食糧が不足した。縄文社会は停滞し、人口の減少と遺跡数の減少をもたらした。下田においても、この期の土器を出土する遺跡は激減している。

紀元前3世紀頃、この縄文社会の停滞を打ち破る新しい生活様式である農耕が大陸から伝わり、日本各地に水稻耕作が広まっていった。これが弥生時代のはじまりである。しかし、下田には弥生時代の遺跡がほとんど発見されない。その原因として、稲をつくるのに都合のよい広い平らな土地がなかったことが考えられている。

イ 古墳時代

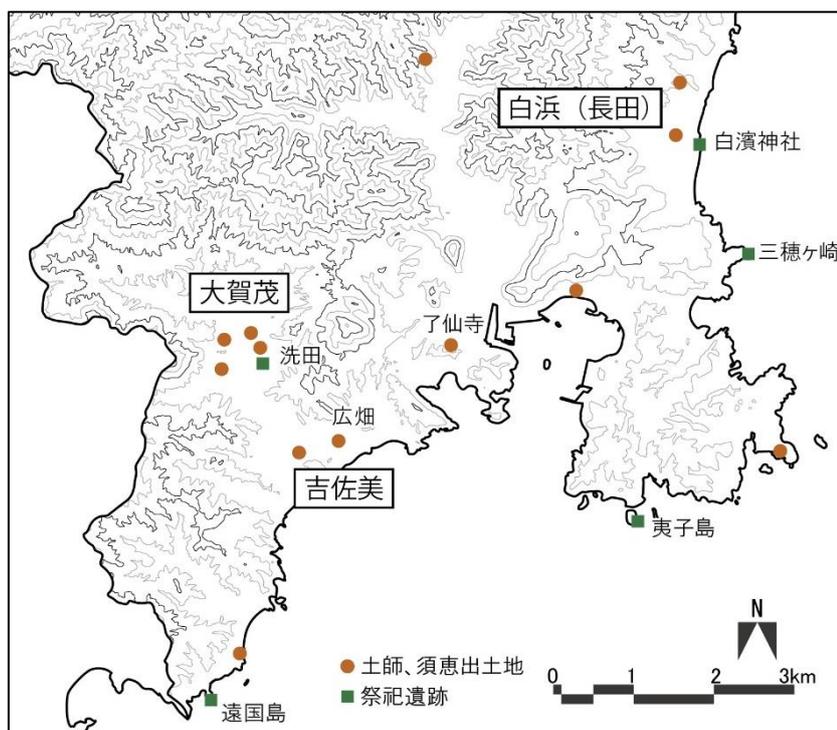
やがて4世紀以降、土木技術や鉄製農耕具が発達した。それにより古墳時代に入ると、耕せる土地が広がり、下田でも再び人々の生活が活性化した。

この時代の人々が使用した、土師器はじきや須恵器すえきとよばれる土器が、各所で発見されており、この時代の代表的な集落遺跡が、吉佐美ひろはたの広畑遺跡である。昭和33年（1958）に実施された発掘



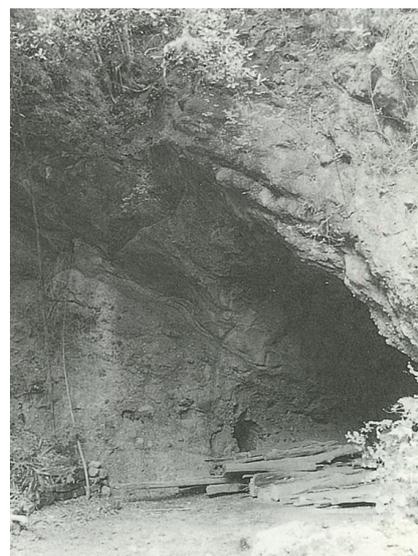
広畑遺跡出土の土師器

によって、壺・甕かめ・坏つき・高坏たかつき等多数の土器が発見され、当時この周辺に大きな集落が営まれていたことがわかっている。その他、大賀茂おおがも周辺や白浜おほの長田ながた一帯にも遺跡が集中しており、当時これらの地域が生活の中心であったことがうかがえる。



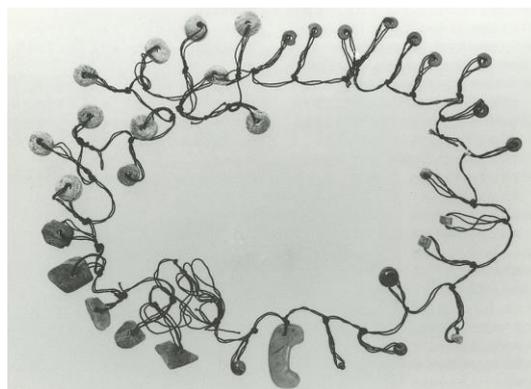
土師器・須恵器出土遺跡分布図

一方、古墳時代といえ、全国各地で大きな塚をもった古墳がつくられたことが特色であるが、下田市を含め南伊豆^{りょうせんじ}一帯ではいまだ発見されていない。しかし、了仙寺^{りょうせんじ}本堂裏に洞窟遺跡のような墓が存在し、他の地域とは異なった様子が見られる。そこからは人骨に加え^{まがたま}勾玉、ガラス玉、金銅製の腕輪や耳飾り、土師器や須恵器など多数の遺物が出土しており、下田湾沿岸地域を支配していた船人^{ふなびとしゅうだん}集団の首長の墓と考えられている。



了仙寺洞窟遺跡

また、古墳時代から奈良・平安期にかけての伊豆では、神を祭る^{さいし}祭祀が盛んであったらしく、神々を祭った跡（祭祀遺跡）がたくさんある。市内には5つの遺跡があり、岬や小島、丘陵など、集落や人々の生活の場とは異なる特殊な場所に立地していることも大きな特色である。三穂ヶ崎^{みほさき}と呼ばれる小さな岬の先端付近の岩場からは、勾玉・丸玉・白玉^{うすだま}等石製の玉類が多数発見された。



三穂ヶ崎遺跡出土の石製玉類

この時代の人々は、立派な建物のあるお宮ではなく、小さな^{ほこら}祠や、石や岩などを積み上げたものを、神のやしろ（神が天からおりてくるところ）として祭っていたようである。下田市には白濱^{しらはま}神社など、島からやってきた神を祭った古い神社がある。白濱神社の社寺内、火達山^{ひたちやま}と呼ばれる付近から、平安期と推定される祭祀用の土師器が多数発見されている。現在でも、毎年火達祭といって海岸で火を焚き、海島に鎮座する神を招く神事が行われている。古代の祭祀場がそのまま後世の神社へと発展した典型的な例といえるであろう。



白濱神社の火達祭

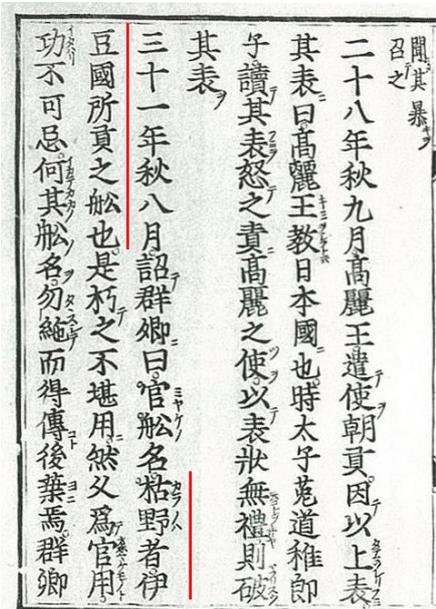
②古代 ^{いずのくに} ー伊豆国のはじまりー

歴史上、伊豆の名が最初に現れるのは『日本書紀』応神天皇5年(274)10月、同31年(300)8月条に記された^{からの}枯野伝説である。伊豆国に命じて船を造らせたところ、その船は軽く浮かび速く走ったので「^{かるの}軽野」といい、のちに転じて「^{かの}枯野」となり、狩野川や狩野山(天城山^{あまぎさん})の語源となったという伝承がある。おそらく、倭の五王の時代に、伊豆は東国への海上交通の要地として、またその優れた航海術と造船技術によって王権と深く結びついていたと考えられる。

伊豆が一国として独立するのは、天武天皇9年(680)のことで、『扶桑略記』に「天武天皇九年庚申七月…駿河の二郡を別けて伊豆国と為す」とある。それまでは、大化改新以降に成立した^{するがのくにみやつこ}珠流河国造の支配下に属していた。

伊豆国が、^{とおとうみ}遠江・駿河両国の3分の1以下の小国でありながら一国とされたのは、『日本書紀』に伊豆島へ罪人が流されたという記述が見られるように、流刑の国に定められたことによると考えられる。

大宝元年(701)大宝律令が完成すると、伊豆国には田方・那賀・賀茂の3郡が置かれた。奈良時代の賀茂郡内には、賀茂^{つきま}・月間・川津・三島(伊豆七島)・大社^{おおやしろ}の5郷に分かれていた。下田市域は、賀茂・月間の一部と、大社郷にあたる。大社郷は、下田白浜を中心に、稲梓・稲生沢・浜崎・下田地区を含む、下田市域の大半を占めていたと考えられる。



日本書紀応神天皇31年8月条



伊豆国の古代郡郷図(10世紀頃)

郡には郡家が置かれ、賀茂郡の郡家は、南伊豆町下賀茂にあったといわれ、市内大賀茂から下賀茂にかけてが、当時の政治的中心であったと推定される。

伊豆はまた火の国でもあった。富士火山帯の活動で噴火が多く、人々はこれを神のたたりと考えていた。なかでも、三嶋大明神は伊豆の主神と考えられ、後の神・伊古奈比咩命とともに崇められた。この二神は、元は三宅島に鎮座していたといわれ、奈良時代には既に白浜の地に移されていた。賀茂郡大社郷の名は三嶋大明神とその後の神を祭る社の所在に由来するものであった。

古代の伊豆を特徴づけるものに伊豆の卜部がある。卜部は、卜占（占い）によって神祇官に仕えたもので、律令制下の三国の卜部とは、伊豆、壺岐、対馬の卜部をいう。伊豆の卜部は亀卜※10に長けており、その技術は彼らの航海術と結びついて発達したものと考えられている。

古代南伊豆の特産品には堅魚があり、堅魚節や煎汁（煮汁）が調（朝廷への貢物）として納められていたことが、平城宮跡から出土した荷札の木簡から明らかにされている。

平安中期になると、海浜の砂鉄を原料とする製鉄が盛んに行われるようになり、下田市内の製鉄遺跡は、金山遺跡のほか、田牛の金草原遺跡、白浜の原田遺跡、同長田タタラド遺跡が知られている。

さらに、この頃には仏教文化も花開き、田牛の長谷寺阿弥陀如来坐像はその代表的な作例である。

※10 亀の甲を焼き、その生じた割れ目の模様で吉凶を判断した古代の占い。

③中世 一下田村の誕生と戦国時代一

治承4年（1180）の源頼朝の挙兵から、天正18年（1590）の下田城の開城・後北条氏の滅亡までのおよそ400年間が伊豆の中世となる。源頼政が伊豆を知行国として支配し、その子仲綱が伊豆国司に任命されていることから、南伊豆の地と源氏との縁も生まれた。頼政の側室である菖蒲御前の墓の存在や数々の頼朝伝説もその縁を語っている。

挙兵後、頼朝の出した最初の下文が蒲谷御厨（田牛周辺）の住民に宛てられたことや、源平の争乱の最中に鯉名や妻良（南伊豆町内）の港が登場することなど南伊豆の地の重さがうかがわれる。

しかし、幾重にも連なる山脈にさえぎられた南伊豆の地では優良な武士団の形成が進まなかった。鎌倉時代を通じて、執権となった北条氏一族が守護となり、伊豆はその支配下に入った。

南北朝動乱期、伊豆は北朝方が優勢を占め、室町期は鎌倉府の支配下に入った。この時期から次第に市内の地名や土豪（その土地の豪族）の存在が明らかになってくる。建武元年（1334）の河内重福院宝篋印塔に刻まれた大檀那沙弥智道をはじめとして、田牛・下田・横川・相玉・落合・白浜等ほとんどの村落の名が小土豪とともに文献上に現れてくる。集落の形成がもっとも進んだ時期である。

下田村の集落の成立期については、南北朝・室町初期の14世紀が下田村の成立時期と推定される。「下田村若宮」と刻まれた鰐口が下田八幡神社に保存されており、応永6年（1399）との年号の刻銘もあることから、八幡神社を祭祀する集落の発展がようやくこの時期にみられるようになったと考えられる。



鰐口（下田八幡神社保存）

伊豆の戦国時代は、延徳3年（1491）、北条早雲が伊豆国に攻め込み、深根城（堀之内）を取り囲んだことにはじまり、これ以後およそ100年間後北条氏の支配下に置かれた。



足利茶々丸の墓

深根城は関戸播磨守信吉の城である。北条早雲が足利茶々丸を討伐した際に、関戸播磨守信吉は茶々丸を伴って深根城に籠ったが、城の中にいた人は一人残らず殺されたと言われている。

こうして、伊豆国は戦国大名後北条氏の領地になり、南伊豆の小世界に勢力を張っていた小土豪たちは後北条氏の軍事組織に組み込まれていった。

やがて、後北条氏は、清水康英を下田城の城将にして、天正18年（1590）、豊臣の水軍が小田原に攻め込むのを防ごうとした。15,000人を超える豊臣方に対し、清水氏はわずか500人ほどの軍勢であったが、50日間も城を守り続け、最後は話し合いにより豊臣方に城を明け渡した。下田開城・後北条氏の滅亡をもって伊豆の戦国時代は終わる。



下田城（模型）

④近世 一町方・村方・浦方の形成一

下田市域の近世支配は、戦国大名後北条氏が滅亡し、徳川家康が江戸に入部した天正18年（1590）より始まる。下田の大部分が徳川家康の家来の戸田忠次^{ただつぐ}によって治められることになり、後に幕府直轄領三島代官所支配地となり、一部下田奉行所支配もあった。近世中期になると、次第に旗本領や大名領（小田原藩大久保氏、掛川藩太田氏、沼津藩水野氏）が増加し、中には相給^{あいきゅう}とって複数の領主によって支配されることも珍しくはなかった。

そのようななかで下田市域は、それぞれの特徴をもつ町方・村方・浦方の三つの地域が形成されていく。

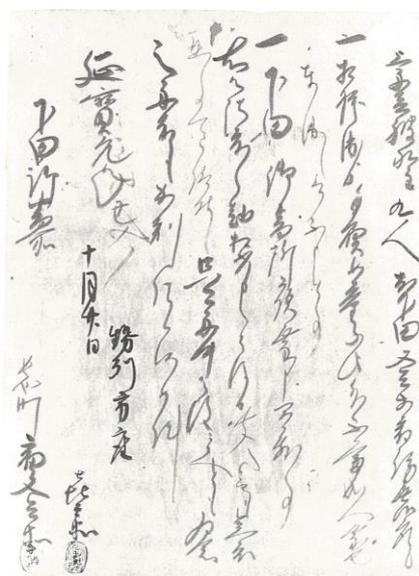
町方

まちとしての下田町は、天正18年（1590）領主となった戸田忠次によりその原形がつくられるが、戸田氏は間もなく三河^{みかわ}に移封されたため、下田町の発展の基礎は、下田奉行と御番所の設置にあると考えられる。

江戸時代の船は帆船（風を受けて推進力とする船）であったため、風向きが悪いと途中の港に入って風待ちをしなくてはならなかった。下田港は江戸に出入りする船にとって大変よい風待港であった。やがて、年貢米^{ねんぐ}や特産品を運ぶために、江戸と大阪の間を廻船^{かいせん}（旅客や貨物を運ぶ船）が通うようになった。下田港は、江戸の政治的経済的発展に伴い、盛んになってきた海上交通の要地として注目され、下田奉行が設置された。

元和2年（1616）、今村彦兵衛^{いまむらひこべえ}が下田奉行に任命され、須崎^{とのみ}に遠見番所を置いて、下田港に出入りする船の見張りをした。元和9年（1623）になると、名前も船改番所^{ふなあらため}（御番所）に変わり、江戸に出入りする船は、必ず下田港に入り、御番所の調べを受けるようになった。日本各地の経済の発達につれて、下田港に出入りする船は、1年間に3,000艘^{そう}ぐらいまで増え、町は大変にぎわった。

下田町は下田奉行と、奉行の下で船改めを行う廻船問屋、町政を担当する町役人などによって運営された。なかでも二代目奉行今村伝四郎正長の武ガ浜浪除けの築造や町役人の平井平次郎^{ひらいへいじろう}による『下田年中行事（1974年）』（江戸時代後期の町政伝承を記録した史料）の編纂などが功績として大きい。



下田番所宛通船手形

享保6年(1721)、下田港の入り口が狭く、風や波が強いときは船の出入りが危険であるとして、御番所は浦賀(神奈川県)に移されることになった。

御番所が置かれてから、およそ100年間栄えてきた下田町は、御番所が移されてから、かつての勢いがなくなり平穏な風待ち港となった。しかし、なお、風待ちのために出入りする船があったため、浦方御用所が置かれ、海の交通安全の仕事は続けられた。

村方

村方は、稲作農業を中心として、麦・粟・稗・いも類などの畑作、そして現金収入を得るための「農間渡世」(農民が耕作の合間に行う賃稼ぎや営業)が必要であった。それらは専ら山稼ぎに依存しており、木炭を中之瀬(稻生沢立野)に運び出して換金したり、薪を下田に運搬して塩や魚と交換したりした。元治元年(1864)下田港から積み出された木炭はおよそ8,000俵、堅木薪1,860把、雑木薪3,100把であった。このように重要な役割を担う山であるから、共同の権利が錯綜する入会地(村や部落などの村落共同体で所有した土地で、薪炭・用材・肥料用の落葉を採取した山林)では、しばしば村落間で利害の対立による争いが発生した。

また、木炭や薪を運び出すのに当時の村道は通行が困難であったため、艀(内水面を航行する船)の運搬が非常に便利だった。稻生沢川と大沢川の合流する地点にある立野村の中之瀬は、稻生沢川上流の山間部と下田港を結ぶ中継地として絶好の場所にあったため、もとは川岸寄りの洲に過ぎなかった所に小さな商店街が形成されるなど発展した。

浦方

浦方は、漁業を生業としていたが、天草漁や鮑漁なども盛んになり特産物となっていた。また、海岸近くを中心に伊豆石が切り出され、江戸に運ばれていった。

村方の入会争論に対して浦方では漁場争いや海岸の境界争いがしばしば発生した。江戸と大阪を結ぶ海上交通の要衝である伊豆の海岸には、しばしば難破船が漂着し、その人命救助や積荷の陸揚げなどの処理に報奨金が支払われたことから、村や漁民の利益となっていた。そのため、海岸の領有は磯物等の権利とも絡んで重要な問題であり、下田湾に打ち上げられた難破船の処理をめぐる下田町・柿崎村と須崎村が争ったこともあった。

町方・村方・浦方の三つの地域は、時代とともに相互につながりを深めながら、地域外との交流も盛んになっていった。

⑤近代の夜明け ―日本開国の舞台となった下田―

江戸時代の後半になると、海外に進出したヨーロッパの強国やアメリカ合衆国の勢力がアジアまで延び、日本の近海にも外国船がたびたび現れるようになった。寛政5年(1793)の老中松平定信まつだいらさだのぶの海防見分かいぼうけんぶん(外国軍の侵攻に対する海岸防備の視察)から、御台場の築造、そしてペリー来航により下田が開港場となり、横浜開港によって閉鎖されるまでの間が下田の幕末である。

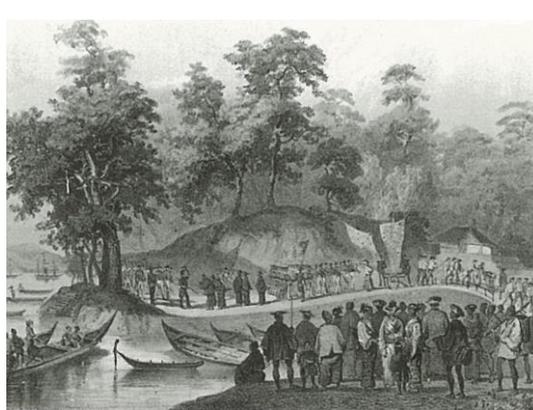
松平定信は海防強化のため伊豆を巡視し、これを受けて御台場の設置の計画がされたが完成しなかった。天保13年(1842)下田奉行が復活し、翌年州佐里崎さざり(須崎)・狼煙崎のろし(鍋田浜と吉佐美の間にある岬)にようやく大砲が設置され、御台場が完成したが、一年で廃止となった。同じ年、沼津藩は伊豆東海岸4か所(白浜みほ三穂ヶ崎ほか)に御台場を完成させ、ペリー来航時まで異国船接近の度に警備を強化した。

嘉永7年(1854)のペリーの再来航、そして日米和親条約の締結により下田開港が決まると、ペリー艦隊が次々と下田に入港してきた。下田が日本外交の中心舞台として、もっとも脚光を浴びた時代となる。

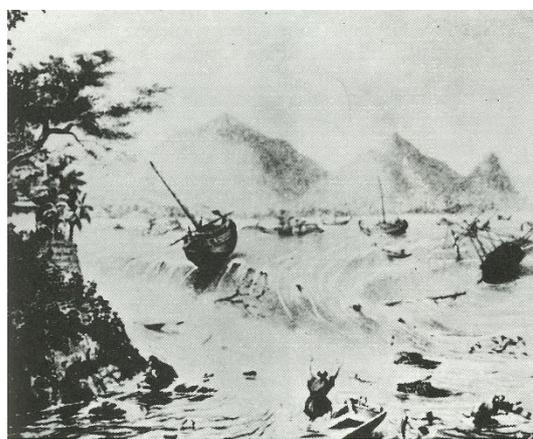
開港場となった下田の町では入港してくる外国船に薪・水・食料・石炭など欠乏品を供給するための拠点(欠乏所)や異人のための休息所さらには洗濯場などが設けられ、開港場の体制が整えられていった。ペリーは了仙寺で日米和親条約付録下田条約を結ぶと帰国するが、この間、下田奉行が再度設置され、異人との応接、欠乏品の供給など多忙を極めた。

ペリーが下田を去った4か月後、ロシア使節プチャーチンの乗ったディアナ号が来航した。

第1回目の日露交渉が福泉寺で開かれ、第2回目の日露交渉を約束して別れた翌日、突如大地震と津波が下田を襲った。下田の町は壊滅状態となり、停泊していたディアナ号も大破した。ロシア側は自国の船員が死亡するなどの惨状のなか、見舞いに医師を同行さ



ペリー一行の上陸



津波に荒れ狂う下田港
(モイジャイスキー画)

せ、傷病者の手当での協力を申し出たことから、応接係をしていた^{むらがきのりまさ}村垣範正（幕末期の外交官）は、その厚意にいたく感服したと伝えられている。

ディアナ号は修理港となった^{へだ}戸田（沼津市内）へ向かったが、激しい波風に押し流されて沈没した。そのような不運にもかかわらず、安政元年（1854）に^{ちようらくじ}長楽寺で日露和親条約の調印を実現した。この条約の中で、初めて日本とロシアの国境についての取り決めもされた。昭和56年（1981）に、日露和親条約の歴史的な意義を確認し、領土の返還を求める日として、条約の結ばれた2月7日を「北方領土の日」とすることが政府により定められた。

安政3年（1856）ハリスがアメリカの日本総領事として下田に着任し、柿崎玉泉寺を領事館とした。その間にハリスと通訳ヒュースケンの^{しじよ}仕女としてお吉やお福が^{ぎよくせんじ}玉泉寺へ通うことになった。安政4年（1857）、天城を越えて江戸へ出たハリスは通商条約の締結を迫り、同5年（1858）条約の締結調印にこぎつけた。この時期から日本の歴史は激動の時代へと突入していくが、横浜開港に伴い下田開港場は閉鎖、下田奉行所も廃止となり、下田の町はもとの港町へと戻っていった。

⑥近代 ー近代産業の波と町の発展ー

明治になると、大名や幕府が治めていた土地や人は、全て国が治めることになり、これまでの藩をなくし県がつくられた。伊豆国は、明治元年（1868）^{にらやま}韮山県となり、明治4年（1871）の廃藩置県により^{さがみ}相模国の一部とともに^{あしがら}足柄県となり、明治9年（1876）に相模と分離して静岡県となった。明治22年（1889）の町村制施行により下田町、稲梓村、稲生沢村、浜崎村、朝日村が成立したが、明治29年（1896）浜崎村から白浜村が分離し、6カ町村となった。

農村部では稲作や麦作の間に薪を切り、炭を焼くという形が続いていた。海岸部では天草や魚貝類の採取を中心とした^{ぎよろう}漁撈作業と田畑耕作を組み合わせる形態が保たれていた。さらに現金収入を求めて、^{ようさん}養蚕に従事し、酪農を取り入れるなど、時々々の経済に柔軟に対応していった。市街地は周辺との密接な結びつきの中で、物資の集散地として、商工業機能を担っていった。また、官公署の出先機関も集中し、南伊豆の行政・商業・交通の要衝としての役割を高めていった。

明治20年代以降、近代産業が展開し、明治21年（1888）下田銀行の開業、明治31年（1898）^{せんきよ}下田船渠（通称下田ドック）の設立、明治41年（1908）河津水力発電の創立などがみられた。交通面では明治28年（1895）天城トンネルが開通、大正5年（1916）下田自動車営業を開始した。

また、明治の末から大正初期にかけて、当時の好況を背景に、^{れんだいじ}蓮台寺、^{こうち}河内の温泉場は大変にぎわっていた。下田町にも温泉が自噴していたが、熱い温泉が欲しいという願望を込めて、町の有力者たちにより稲生沢村から下田町に引湯する計画がたてられ、昭和10年（1935）に初めて念願の温泉が下田町に到着した。

昭和2年（1927）の金融恐慌、昭和4年（1929）の世界恐慌の中、不況脱出に下田の人たちが活路を見出したのが観光であった。美しく変化に富んだ自然、豊富な温泉、幕末開港の歴史を秘めた港町、素朴な人情などを観光の資源として活用し、観光地化を推し進めた。昭和8年（1933）に伊豆循環道路東海岸線（伊東—下田線）が開通し、この時期東京湾汽船による東京—大島—下田航路も始まった。

昭和9年（1934）に第1回^{くろふね}黒船^{さい}祭が始まり、順調に進むかに見えたが、第二次世界大戦（1939～1945）によりこの歩みは中断された。



黒船祭・弁天に上陸する米水兵

⑦現代 —伊豆急行線開通による観光都市への発展—

第二次世界大戦後は、日本国憲法のもとで地方分権の強化と地方行政の民主化が推進された。昭和28年（1953）10月に施行された町村合併促進法により、全国的な町村合併の気運が高まっていき、昭和30年（1955）に6か町村が合併し、新しい下田町が成立した。昭和32年（1957）には新しい町役場も東本郷の地に完成した。

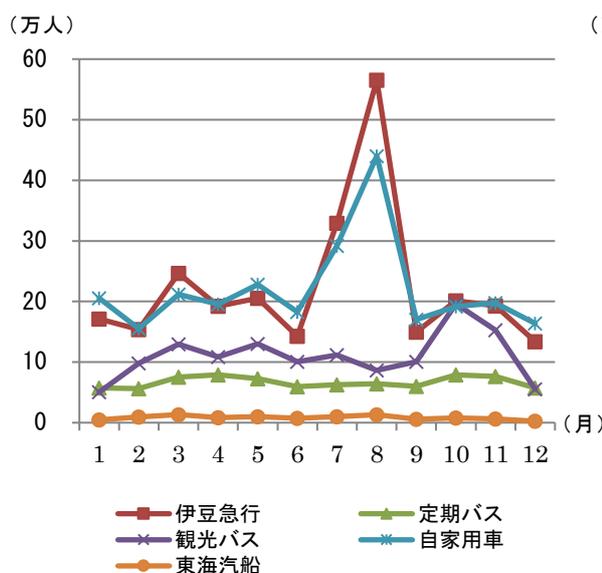
下田が観光を中心とする都市へと大きく転換するのは、昭和36年（1961）の伊豆急行線開通によってである。伊豆急下田駅周辺は、初めての電車を見ようとする人々であふれ、祝賀パレード・花火大会・提灯行列等で祝い喜んだ。



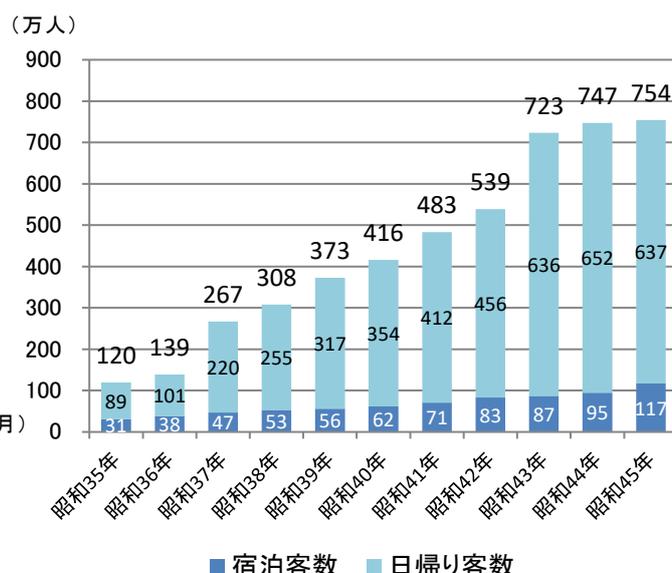
伊豆急行線の開通でにぎわう駅周辺

また、鉄道とあいまって、^{なわじ}縄地

有料道路（国道 135 号）の開通もモータリゼーションの進行に合致し、大量の自動車の流入をもたらし、観光客の激増を呼んだ。観光客は、昭和 36 年（1961）の 139 万人から昭和 37 年（1962）は 267 万人と急増し、さらに増え続け、昭和 42 年（1967）の 539 万人から昭和 43 年（1968）は 700 万人を超えた。観光施設が整備され、海岸部では民宿が主産業になり、伝統的な産業形態は一変した。



昭和 45 年交通機関別利用客数



来遊客数の推移

昭和 45 年（1970）地方自治法の改正に伴い市制成立の要件が緩和され、昭和 46 年（1971）に下田市が誕生した。同年 11 月 5 日には須崎に御用邸が完成し、下田市民にとって昭和 46 年（1971）は画期的な年であった。

昭和 49 年（1974）5 月 9 日の伊豆半島沖地震で被害を受け、これ以後も南伊豆は地震や水害などの自然災害に見舞われ、南伊豆の観光産業は大打撃を受けた。こうした南伊豆の暗いイメージを払拭したのが、昭和 54 年（1979）のアメリカ大統領ジミー・カーターの下田訪問であった。東京サミット（先進国首脳会議）に出席する際に下田に立ち寄るというものであって、短い滞在であったが、下田にとっては黒船来航以来の歴史的一日となった。

昭和 62 年（1987）には下田船渠^{※11}（通称下田ドック）が解散した。同年、観光客は 626 万人をピークに、再び減少傾向に転じ、平成 10 年（1998）に 500 万人を切り、その後も減少傾向が続き、金融危機や東日本大震災などの影響もあり、平成 21 年（2009）以降は、300 万人を下回っている。

※11 下田船渠は下田を代表する造船会社。創業 90 年以上の地域の中核企業の解散は第 111 回国会の参議院運輸委員会でも取り上げられた。

⑧現代 ー歴史まちづくりへの取組ー

観光地としての下田は、自然資源を中心とした取組が盛んに行われ、それによって近代化が進み市街地が発展する一方で、歴史的なまちなみが急速に失われていった。

そうしたなか、昭和60年代に入ると、地方文化及び地域的遺産を象徴する歴史的建造物、その他なまこ壁の保存を目的に、なまこ壁と伊豆石の現存状況に関する調査が実施され、歴史的建造物保存条例が制定されると、12件が歴史的建造物として選定された。

また、^{ひらなめがわ}平滑川沿いのかつての^{かりゅうかい}花柳界があった地区を核に「平滑川を良くする会」が発足し、地域空間の質的見直しが始まった。修景整備が進められ、「平滑川通り」から「ペリーロード」に名称変更し、平成6年（1994）に第7回静岡県都市景観賞で最優秀賞（静岡県知事賞）を受賞した。

平成21年（2009）には、下田市景観計画の策定に併せて下田市景観まちづくり条例が制定され、景観や地域文化などを対象に地域を象徴するものを市民から募集し、下田まち遺産として認定を行っている。

＜コラム4 なまこ壁のまちなみの成立＞

なまこ壁や伊豆石は、下田らしさを象徴する景観となっている。下田市域には、なまこ壁を用いた歴史的建造物が多く残っており、特に旧下田町内に集積している。なまこ壁は、建物の壁面に平瓦を並べて貼り、目地と呼ばれる継ぎ目に、漆喰をかまぼこ型に盛り上げて塗る左官工法であり、その形が海にいる「なまこ」に似ていることから、その名が付けられたという。風雨に強く、防火、保温にも優れ、江戸時代以降普及し、かつては伊豆各地で多く見られた。

下田のまちなみについて、『ペリー艦隊日本遠征記』では「店舗と住居の建築はそま^{くさぶき}つなもので大部分は草葺の小屋にすぎない。」と評されており、上流階級の家屋の一部においてなまこ壁と思われる漆喰の利用が見られるものの、下田全体としては草葺屋根が多かったとされる。



下田八幡神社の図
(ペリー艦隊日本遠征記)

下田は文化年間（1804～1818）に4度の火災、安政元年（1854）に安政東海地震と津波に見舞われ、市街地のほとんどが壊滅した。開港した直後の11月に大津波の被害を受けたため、幕府による復興資金貸付を用いて、短期間で復興がなされ、安政2年（1855）には一通りの再建を終えた。

災害からの復興を契機に、なまこ壁が防災特性に優れた外壁材として認知され、一般家屋にも利用されるようになり、なまこ壁建造物が連なるまちなみが形成されたと言われている。また、地場産業として石材・石造りの技術があったことも、なまこ壁のまちなみが形成された理由として挙げられる。



伊豆石の塀となまこ壁の建物



左側「鈴木邸」、右側「雑忠」^{さいちゆう}

下田の歴史年表

| 年代 | 西暦 | 事項 |
|-----------|------|---|
| 天武 天皇9 | 680 | 駿河、遠江、伊豆の三国ができる。(現在の静岡県) |
| 大宝1 | 701 | 伊豆に田方・那賀・賀茂の3郡が置かれる。 |
| 嘉禄1 | 1225 | 白濱神社に若宮御正体が奉納される。 |
| 応永6 | 1399 | 下田八幡神社に、鰐口奉納される。(下田村の初見) |
| 延徳3 | 1491 | 北条早雲が深根城を取り囲んだ。 |
| 天正16 | 1588 | 後北条氏、豊臣方水軍の東征に備えて下田城を築く。 |
| 天正18 | 1590 | 3月上旬豊臣方水軍、下田城へ押し寄せる。 |
| | | 4月下旬下田開城、城将清水康英は河津林際寺へ身を寄せる。 |
| | | 7月 小田原開城、後北条氏滅亡、秀吉の天下になる。 |
| | | 8月 家康旗下、戸田忠次、下田五千石の領主となる。 |
| 慶長11 | 1606 | 大久保石見守長安が伊豆の金山奉行となる。 |
| 元和元 | 1615 | 家康、大坂夏の陣に備え今村伝四郎に下田警備を命ずる。 |
| 元和2 | 1616 | 初代下田奉行今村彦兵衛、須崎に遠見番所を置く。 |
| 元和9 | 1623 | 大浦に遠見番所が移る。 |
| 寛永12 | 1635 | 今村伝四郎正長、了仙寺創建。 |
| 寛永13 | 1636 | 大浦の御番所を改築し船改番所とし、上下の廻船を検問する。 |
| 正保2 | 1645 | 今村伝四郎正長、武ガ浜浪除けを普請。 |
| 享保6 | 1721 | 2月 御番所が浦賀に移り、下田奉行が廃止。 |
| 寛政5 | 1793 | 3月 松平定信、伊豆海防見分、谷文晁『公余探勝図』。 |
| 天保13 | 1842 | 12月 下田奉行復活、初代小笠原加賀守。 |
| 天保14 | 1843 | 4月 幕府は州佐里崎・狼煙崎、沼津藩は三穂ヶ崎に御台場築造。 |
| | | 9月 下田町書役、平井平次郎『下田年中行事』87巻完成。 |
| 弘化元 | 1844 | 2月 下田奉行は、二代土岐丹波守をもって廃止。 |
| 嘉永6 | 1853 | 6月3日 ペリー、浦賀に来航。 |
| | | 7月18日 プチャーチン、長崎に来航。 |
| 嘉永7 | 1854 | 1月12日 ペリー、軍艦9隻で浦賀へ再来航。 |
| | | 3月3日 日米和親条約12ヶ条、神奈川で締結、下田開港。 |
| | | 3月18日からペリー艦隊7隻、順次下田来航。 |
| | | 3月22日 下田奉行再々置、初代奉行に都築駿河守、井上信濃守。(宝福寺、稲田寺が仮奉行所となる。) |
| | | 3月24日 ペリー、上陸して了仙寺で饗応を受ける。 |
| | | 3月27日 吉田松陰「踏海の企て」、柿崎弁天島より漕ぎ出すも失敗。 |
| | | 5月22日 日米和親条約付録下田条約13ヶ条を了仙寺で調印、欠乏品の供給。 |
| | | 6月1日 ペリー、目的を達して下田を去る。 |

| 年代 | 西暦 | 事項 |
|------|------|---|
| | | 10月15日 プチャーチン、ディアナ号で下田に入港。 |
| | | 11月3日 第1回日露交渉、福泉寺で行う。 |
| | | 11月4日 大地震・大津波で下田は壊滅状態、ディアナ号大破。 |
| 安政元 | 1854 | 11月27日 「嘉永」から「安政」へと改元。 |
| | | 12月21日 日露和親条約9ヶ条と付録4ヶ条を長楽寺で締結。 |
| 安政2 | 1855 | 3月 プチャーチン、ヘダ号で帰国。 |
| | | 12月 下田奉行所、中村に完成。 |
| 安政3 | 1856 | 7月21日 ハリス、駐日総領事として下田来航。 |
| | | 7月25日 ハリス、御用所で饗応を受ける。日米双方11人ずつ列席。 |
| | | 8月5日 ハリス、玉泉寺入り、玉泉寺は日本最初の米国総領事館となる。 |
| 安政4 | 1857 | 5月22日 お吉、玉泉寺へ支度金25両で出仕。 |
| | | 5月26日 下田協約が締結される。(日米貨幣交換比率改定) |
| | | 10月7日 ハリス、下田を発ち天城・箱根を越えて江戸へ。 |
| 安政5 | 1858 | 6月19日 日米修好通商条約、ポーハタン号艦上で締結。 |
| 安政6 | 1859 | 5月2日 横浜開港、ハリス下田を去り、玉泉寺領事館閉鎖。 |
| | | 12月 下田開港場と奉行所が閉鎖。 |
| 文久2 | 1862 | 下岡蓮杖、横浜野毛に写真館を開く。 |
| 明治1 | 1868 | 伊豆は韭山県と一部菊間藩などの支配となる。 |
| 明治3 | 1870 | 11月 神子元島灯台点灯。 |
| 明治4 | 1871 | 伊豆は全て足柄県の管轄となる。 |
| 明治9 | 1876 | 足柄県が廃止され、伊豆は静岡県に編入される。 |
| 明治22 | 1889 | 市町村制施行により下田町、稲梓村、稲生沢村、浜崎村、朝日村となる。 |
| 昭和9 | 1934 | 4月 開港80周年記念、第1回黒船祭。 |
| 昭和30 | 1955 | 6か町村が合併し、下田町となる。 |
| 昭和36 | 1961 | 12月 伊豆急行、伊東一下田間開通。 |
| 昭和46 | 1971 | 1月 下田市制施行。 |
| | | 11月 須崎御用邸完成。 |
| 昭和49 | 1974 | 5月9日 伊豆半島沖地震で被害を受ける。 |
| 昭和54 | 1979 | 6月 カーター米国大統領、下田でタウンミーティング。 |
| 昭和56 | 1981 | 北方領土返還第1回下田集会が開かれる。 |
| 昭和62 | 1987 | 下田船渠(下田ドック)の解散。 |
| 平成3 | 1991 | 集中豪雨で稲梓の落合などに大きな被害がでる。 |
| 平成6 | 1994 | 第7回静岡県都市景観賞で最優秀賞(静岡県知事賞)を受賞。 |
| 平成11 | 1999 | ベイ・ステージ下田ができる。 |
| 平成15 | 2003 | ベイ・ステージ下田が「道の駅」に登録され、道の駅「開国下田みなと」としてオープンする。 |

(2) 関わりのある人物

下田奉行・今村伝四郎正長^{いまむらでん しろうまさなが}

天正16年(1588)～承応2年(1653)

今村伝四郎正長は三河以来の徳川家の旗本であり、寛文12年(1672)に三代将軍徳川家光の命によって第二代下田奉行となった。正長は下田港に自費で防波堤を造って入港する船の安全を確保し、荒れた山に植林することで下田湾に入る河の水を浄化し、また了仙寺と八幡神社を創建するなど下田の繁栄の土台を築いた。その功績は下田の歴史の中でも並ぶものがなく、下田の小学校の校歌にも歌われている。

中根東里^{なかねとうり}

元禄7年(1694)～明和2年(1765)

江戸中期の儒学者。名は若思^{じゃくし}、字は敬夫^{あぎな}、通称は貞右衛門^{さだ えもん}、東里は号。父は下田村の農民で医者^{いしや}を兼ねていたが、中根東里は13歳で父の死にあい、禅宗の僧となる。数年後、浄土宗に移り、19歳で荻生徂徠^{おぎゅうそらい}(江戸中期の儒学者)に入門し、その後還俗^{げんぞく}※12。しだいに朱子学に傾倒し、23歳で室鳩^{むろきゅう}(江戸中期の儒学者)に師事。さらに陽明学に転向した。著書に『学則』^{しんが}『東里遺稿』^{とうりいこう}などがある。

※12 一度出家した者がもとの俗人に戻ること。

平井平次郎^{ひらいへいじろう}

安永3年(1773)～天保14年(1843)

勤続40年にも及んだ町役人平井平次郎は、津波で町の古記録が消失したのを嘆いて、苦心の末、天保14年(1843)に下田年中行事87巻を完成させた。これにより、往昔の下田の地勢、風俗をはじめとした寺社縁起、役所への報告、訴訟など詳細に伺い知ることができるので、町はその功績に報いるため、没後51年間にわたり供養料を送り、明治26年(1893)にはその称徳碑^{しょうとくひ}を八幡神社境内に建立した。



平井平次郎

マシュー・カルブレイス・ペリー

寛政6年（1794）～安政5年（1858）

嘉永7年（1854）3月3日、横浜で日米和親条約を結んで下田と箱館（現、函館）を開港させたペリーは、嘉永7年（1854）3月から4月までの間に黒船7隻を下田に集結させた。そして約1か月箱館の調査に行き、箱館から戻ると条約の交渉を始めた。嘉永7年（1854）5月22日、了仙寺で日米和親条約付録下田条約13か条を結んで目的を果たし、6月には下田港を出港した。



ペリー艦隊来航記念碑

エフィム・プチャーチン

享和3年（1803）～明治16年（1883）

ペリー艦隊が嘉永7年（1854）6月に帰国して4か月後に、プチャーチンは新鋭船ディアナ号に乗って下田に来航した。第1回日露交渉が嘉永7年（1854）11月3日福泉寺にて開かれたが、その翌日、突然大地震とともに大津波が下田湾を襲い、下田は壊滅状態になった。ディアナ号は大破し、修理のため戸田港へ曳航中に富士沖に流され戸田に引き返す途中で沈没した。船を失ったプチャーチンは幕府に代船建造を願い出て「ヘダ号」の建造を始めると、下田に戻り長楽寺で同年（1854）12月21日、日露和親条約を結んだ。

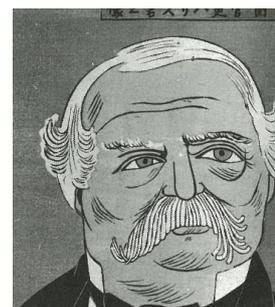


エフィム・プチャーチン
（東洋文庫蔵）

タウンゼント・ハリス

文化元年（1804）～明治7年（1874）

安政3年（1856）タウンゼント・ハリスは、玉泉寺に日本最初のアメリカ領事館を開き、本堂の前の庭に星条旗を掲げた。安政5年（1858）日米修好通商条約を結び、横浜を開港させると、安政6年（1859）東京麻布の善福寺に公使館を設け移ったので、ハリスが下田にいたのは3年あまりだった。



タウンゼント・ハリス

しもおかれんじょう
下岡蓮杖

文政6年（1823）～大正3年（1914）

下岡蓮杖は、下田中原町（現在二丁目）に生まれ、13歳で江戸へ出て画伯狩野董川かのうとうせんの門に入り、旗本の家で初めて銀板写真を見て、写真術を志した。安政3年（1856）ハリス来日の際、通訳ヒュースケンより山中に隠れて写真術を学び、後横浜で米写真師ウンシンの門に入って研究をしたが、兩人などが去った後は、山積する困難と戦いながら、ついに独力で薬液化合に成功した。文久元年（1861）に横浜に写真館を開業して多くの門弟を導き、我が国の写真術の元祖となった。また、明治9年（1876）浅草でパノラマ展を催し、我が国のパノラマ開祖となった。



下田公園内下岡蓮杖の碑

よしだしょういん
吉田松陰

天保元年（1830）～安政6年（1859）

天保元年（1830）長州藩士の次男として生まれた。海外密航を決意し、嘉永7年（1854）日米和親条約の締結により即時開港された下田に、米国ペリー艦隊を追ってたどり着く。蓮台寺の蘭医村山行馬郎むらやまぎょうまろうの邸に身を寄せ、金子重輔かねこしげのすけとともに柿崎弁天島より小舟でペリーの旗艦ポーハタン号きかんに乗り付け、「万国の実情を勉強したい」と嘆願したが拒否された。海外渡航の罪を自首し、江戸伝馬町の獄に送られた。その後、長州へ戻ることを許され、松下村塾を開いた。



柿崎弁天島の吉田松陰と金子重輔の銅像

とうじん きち
唐人お吉

天保12年（1841）～明治23年（1890）

唐人お吉は本名を斎藤きちといい、14歳で芸妓になり、評判の美人であった。それが奉行所の目に留まることとなり、17歳の時、玉泉寺駐在のハリスに看護の名目で下田奉行から派遣された。病気もちの理由でまもなく帰されたが、当時の世相のもとでは好奇の目をもって見られ、お吉は料理屋、髪結いなどをして生計を立てたものの世間に入れられず、自害した。お吉は身寄

りがなかったため、宝福寺の住職が慈愛の心で境内に手厚く葬った。

なかむらがくりょう
中村岳陵

明治23年(1890)～昭和44年(1969)

中村岳陵は旧岡方村^{おかがた}で生まれ、幼少の頃より絵画にひいで、明治33年(1905)上京し、同41年(1913)東京美術学校日本画科に入学し、卒業後法隆寺壁画模写主任の重責を全うし、大阪四天王寺壁画制作に当たるなど、日本画壇^{がだん}に大きな足跡を残した。日本芸術院会員、院展審査員等を経て、昭和37年(1962)文化勲章を受けるに至った。こうした偉大な功績に対し、町は翌38年(1963)下田町名誉町民の称号を贈った。



中村岳陵

もりはじめ ふすい
森一(斧水)

明治34年(1901)～昭和36年(1961)

森一(斧水)は、大正から昭和にかけて郷土誌『黒船』を主宰した人物である。大正13年(1924)10月、黒船社によって雑誌『黒船』が創刊された。黒船社のメンバーは、第一次大戦後の大正期の自由な雰囲気の中で近代教育を受けて育った豆陽^{とうよう}中学校の同期生が中心であった。幕末に開港地として外国文化との接触の機会をもった下田の文化的土壌の中から、異国情緒を漂わせる名称の雑誌が誕生した。



森一(斧水)

4 文化財等の分布状況

下田市には数多くの文化財が残っている。国指定文化財は7件あり、彫刻2件、史跡3件、天然記念物2件となっている。

県指定文化財は10件あり、工芸品3件、建造物1件、史跡1件、天然記念物5件を指定している。

市指定文化財は56件あり、彫刻8件、工芸品5件、書籍1件、古文書7件、歴史資料2件、有形民俗文化財3件、無形民俗文化財3件、史跡19件、名勝2件、天然記念物6件を指定している。(平成30年4月3日時点)

指定文化財件数

| 類型 | | 国指定 | 県指定 | 市指定 | 合計 |
|-------|---------|-----|-----|-----|----|
| 有形文化財 | 彫刻 | 2 | | 8 | 10 |
| | 工芸品 | | 3 | 5 | 8 |
| | 書籍 | | | 1 | 1 |
| | 古文書 | | | 7 | 7 |
| | 歴史資料 | | | 2 | 2 |
| | 建造物 | | 1 | | 1 |
| 民俗文化財 | 有形民俗文化財 | | | 3 | 3 |
| | 無形民俗文化財 | | | 3 | 3 |
| 記念物 | 史跡 | 3 | 1 | 19 | 23 |
| | 名勝 | | | 2 | 2 |
| | 天然記念物 | 2 | 5 | 6 | 13 |
| 合計 | | 7 | 10 | 56 | 73 |

(1) 国指定文化財

国指定文化財一覧

| | 種別 | 名称 | 所有者、管理者 | 指定年月日 | 所在地 |
|---|----------|----------------------|---------|------------|--------------|
| 1 | 重要文化財・彫刻 | 木造阿弥陀如来坐像 | 長谷寺 | 大正8年4月12日 | 下田市田牛(長谷寺) |
| 2 | 重要文化財・彫刻 | 木造大日如来坐像 | 天神神社 | 大正9年4月15日 | 下田市蓮台寺(天神神社) |
| 3 | 史跡 | 玉泉寺 | 玉泉寺 | 昭和26年6月9日 | 下田市柿崎(玉泉寺) |
| 4 | 史跡 | 了仙寺 | 了仙寺 | 昭和26年6月9日 | 下田市三丁目(了仙寺) |
| 5 | 史跡 | 神子元島燈台 | 国土交通省 | 昭和44年7月25日 | 下田市神子元島 |
| 6 | 天然記念物 | 八幡神社のイスノキ | 八幡神社 | 昭和16年2月28日 | 下田市吉佐美(八幡神社) |
| 7 | 天然記念物 | 伊古奈比咩命神社の アオギリ自生地 | 白濱神社 | 昭和20年2月22日 | 下田市白浜(白濱神社) |

木造阿弥陀如来坐像 (重要文化財・彫刻)

像高 86.5cm。像に眼をじかに彫った彫眼、現状は古色仕上げの像。材は桧ひのき又は榿かや。技法は寄木造説いちぼくわりはぎと一木割いちぼくわりはぎ造説いちぼくわりはぎ※13がある。小ぶりで浅い彫りの目鼻立ちが生む穏やかな面貌などに定朝様じょうちょうよう※14の影響が見られる。平安後期の作。治承4年(1180)に近くの遠国島に漂着したと伝えられ、伊豆各地に残る漂着伝説を持つ。



木造阿弥陀如来坐像

※13 寄木造が頭体幹部の根幹をなす材を同等の2材以上で作るものに対して、一木割造は、頭体幹部を1材で作り、一旦2つに割り離し、内割り(内部をくり抜く)を施した後、くっつける技法。

※14 平安時代の仏師・定朝にはじまる和様の仏像彫刻様式。

木造大日如来坐像 (重要文化財・彫刻)

像高 114.0cm。金剛界大日如来特有の智拳印ちけんいん※15を結ぶ密教像。現在は地名に名を残すのみの廃寺である蓮台寺の本尊であったと考えられる。桧の寄木造。彫眼で、像の表面には漆箔を施す。面の幅と長さがほぼ同じとなる穏やかな丸顔や優美な表現など、平安時代後期の様式を残した鎌倉初期の像とされている優作であり、伊豆半島を代表する仏像の一つである。



木造大日如来坐像

※15 胸の前で、左手をこぶしに握って人さし指だけ立て、それを右手で握る印。

了仙寺（史跡）

了仙寺は、寛永12年(1635)、三代将軍徳川家光公の命を受け、第二代下田奉行今村いまむら伝四郎正長でんしろうまさながによって創建された。ペリーをはじめとする米国使節の接待所兼徳川幕府との交渉場所となり、嘉永7年(1854)5月、日米和親条約付録下田条約が締結された場である。



了仙寺

玉泉寺（史跡）

嘉永7(1854)、下田条約が締結されると、玉泉寺は米人の休息所、埋葬所に指定された。安政3年(1856)、初代アメリカ総領事となったハリスは下田に入港し、我が国最初の領事館として玉泉寺が使われ、通訳ヒュースケンも居住した。境内には、アメリカ人、ロシア人、ヒュースケンに仕えたお福の墓、米国領事館となり日本で最初に星条旗が掲揚された場所を記念する碑等、その他多数の開港史跡が見られる。



玉泉寺

神子元島燈台（史跡）

下田港から南へ約10kmの海上にある。慶応2年(1866)英・仏・米・蘭と調印した改税約書により、かんのんざき観音崎(三浦半島東端)・つるぎざき剣崎(三浦半島南端)など8か所のうちのひとつとして建設が義務づけられた。英国人技師ブラントンの監督のもとに明治2年(1869)2月、工事に着工し、下田エビス崎(現在の下田公園内)より切出した石を用い、翌3年11月完成した。現役では我が国最古の洋式灯台である。



神子元島燈台

(2) 県指定文化財

県指定文化財一覧

| | 種別 | 名称 | 所有者、管理者 | 指定年月日 | 所在地 |
|----|-------|------------------|-----------|-------------|-----------------|
| 1 | 工芸品 | 鰐口 | 白濱神社 | 昭和31年10月17日 | 下田市白浜 (白濱神社) |
| 2 | 工芸品 | 鰐口(応永三十年の陰刻銘あり) | 個人 | 平成30年4月3日 | 下田市 |
| 3 | 工芸品 | 鰐口(応永二十八年の陰刻銘あり) | 地区自治会 | 平成30年4月3日 | 下田市 |
| 4 | 建造物 | 河内の宝篋印塔 | 重福院 | 昭和63年3月18日 | 下田市河内 (重福院) |
| 5 | 史跡 | 吉田松陰寓寄処 | 下田市・私有地 | 昭和16年10月27日 | 下田市蓮台寺 |
| 6 | 天然記念物 | 田牛ハマオモト自生地 | 私有地 | 平成27年4月1日 | 田牛海後ノ浜 |
| 7 | 天然記念物 | 白濱神社のビャクシン樹林 | 白濱神社 | 昭和44年5月30日 | 下田市白浜 (白濱神社) |
| 8 | 天然記念物 | 偽層理 | 三島神社・鷺島神社 | 昭和54年11月19日 | 下田市柿崎 弁天島 |
| 9 | 天然記念物 | 報本寺のおガタマノキ | 報本寺 | 昭和57年11月26日 | 下田市加増野 (報本寺) |
| 10 | 天然記念物 | 爪木崎の柱状節理 | 須崎区 | 昭和57年11月26日 | 下田市須崎 |

河内の宝篋印塔 (建造物)

建武元年(1334)建立の格調高い宝篋印塔で、元々重福院の北西側対岸の高台、塔の平にあったものが、時代の移り変わりとともに何度か移動し、現在の場所に安置されたと伝えられている。総高247cm。妙忍が施主となり、覚円や大壇那沙弥智道の協力によって建立された旨の刻銘がある。



河内の宝篋印塔

報本寺のおガタマノキ (天然記念物)

モクレン科の常緑高木。西南日本など温暖な地方に多く自生しているが、それ以外でこれほどの大木は珍しい。近年、相次いで枝が折れ心配されたが、その後樹勢も回復し、3月頃になると白く香気のある可憐な花を咲かせる。樹高25m、周囲4m、樹齢推定300年。



報本寺のおガタマノキ

(3) 市指定文化財

市指定文化財一覧

| | 種別 | 名称 | 所有者、管理者 | 指定年月日 | 所在地 |
|----|-------------------|----------------|------------|-------------|--------------|
| 1 | 彫刻 | 不動明王坐像 | 宝徳院 | 昭和56年8月7日 | 下田市吉佐美(宝徳院) |
| 2 | 彫刻 | 薬師如来坐像 | 白濱神社 | 昭和56年8月7日 | 下田市白浜(白濱神社) |
| 3 | 彫刻 | 阿弥陀如来坐像 | 稲田寺 | 昭和56年8月7日 | 下田市一丁目(稲田寺) |
| 4 | 彫刻 | 四天王像 | 天神神社 | 昭和56年8月7日 | 下田市蓮台寺(天神社) |
| 5 | 彫刻 | 観音菩薩立像 | 観音寺 | 昭和56年8月7日 | 下田市須崎(観音寺) |
| 6 | 彫刻 | 薬師如来坐像 | 観音寺 | 昭和56年8月7日 | 下田市須崎(観音寺) |
| 7 | 彫刻 | 薬師如来坐像 | 曹洞院 | 平成12年8月30日 | 下田市大賀茂(曹洞院) |
| 8 | 彫刻 | 二天立像 | 曹洞院 | 平成13年9月4日 | 下田市大賀茂(曹洞院) |
| 9 | 工芸品 | 鰐口 | 八幡神社 | 昭和44年4月25日 | 下田市一丁目(八幡神社) |
| 10 | 工芸品 | 御正躰(懸仏) | 白濱神社 | 昭和56年8月7日 | 下田市白浜(白濱神社) |
| 11 | 工芸品 | 水草双鳥鏡 | 白濱神社 | 昭和56年8月7日 | 下田市白浜(白濱神社) |
| 12 | 工芸品 | 亀甲地双雀鏡 | 白濱神社 | 昭和56年8月7日 | 下田市白浜(白濱神社) |
| 13 | 工芸品 | 山吹双鳥鏡 | 白濱神社 | 昭和56年8月7日 | 下田市白浜(白濱神社) |
| 14 | 書籍 | 下田年中行事 | 下田市 | 昭和44年4月25日 | 下田市四丁目 |
| 15 | 古文書 | 北条家寺中安堵朱印状 | 本覚寺 | 昭和60年12月23日 | 下田市四丁目(本覚寺) |
| 16 | 古文書 | 北条家寺中安堵朱印状 | 太梅寺 | 昭和60年12月23日 | 下田市横川(太梅寺) |
| 17 | 古文書 | 佐野北条氏忠朱印状 | 白濱神社 | 昭和60年12月23日 | 下田市白浜(白濱神社) |
| 18 | 古文書 | 吉田泰盛寺領朱印状 | 太梅寺 | 昭和60年12月23日 | 下田市横川(太梅寺) |
| 19 | 古文書 | 北条家寺中安堵朱印状 | 本覚寺 | 昭和60年12月23日 | 下田市四丁目(本覚寺) |
| 20 | 古文書 | 安国寺恵瓊奉制札 | 太梅寺 | 昭和60年12月23日 | 下田市横川(太梅寺) |
| 21 | 古文書 | 寂用禅師語録 | 太梅寺 | 昭和60年12月23日 | 下田市横川(太梅寺) |
| 22 | 歴史資料 | 第三代下田奉行石野八兵衛位牌 | 大安寺 | 平成18年3月28日 | 下田市四丁目(大安寺) |
| 23 | 歴史資料 | 豆州下田港之図 | 下田市 | 平成18年3月28日 | 下田市四丁目 |
| 24 | 有形民俗文化財 | 仏谷の十六羅漢三十三観音 | 宝徳院 | 昭和51年5月27日 | 下田市吉佐美(宝徳院) |
| 25 | 有形民俗文化財 | 小白浜三十三観音・エンマ | 観音寺 | 昭和51年5月27日 | 下田市須崎 |
| 26 | 有形民俗文化財 | 元理源寺三十三観音 | 泰平寺 | 昭和51年5月27日 | 下田市五丁目 |
| 27 | 無形民俗文化財 (民俗芸能) | 三番叟 | 白濱神社三番叟保存会 | 昭和48年6月12日 | 下田市白浜(白濱神社) |

第1章 下田市の歴史的風致形成の背景

| | 種別 | 名称 | 所有者、管理者 | 指定年月日 | 所在地 |
|----|-------------------|--------------------|-------------|------------|-------------|
| 28 | 無形民俗文化財 (風俗習慣) | 鬼射 | 落合鬼射保存会 | 昭和51年5月27日 | 下田市落合(高根神社) |
| 29 | 無形民俗文化財 (風俗習慣) | 山随院権現祭幡廻し | 加増野ハタマワシ保存会 | 昭和51年5月27日 | 下田市加増野(報本寺) |
| 30 | 史跡 | 長楽寺 | 長楽寺 | 昭和46年9月6日 | 下田市三丁目 |
| 31 | 史跡 | 下田城址 | 下田市 | 昭和48年6月12日 | 下田市三丁目 |
| 32 | 史跡 | 今村伝四郎等三代の墓 | 了仙寺 | 昭和48年6月12日 | 下田市三丁目(了仙寺) |
| 33 | 史跡 | 戸田忠次の墓 | 泰平寺 | 昭和48年6月12日 | 下田市四丁目(泰平寺) |
| 34 | 史跡 | 火達山遺跡 | 白濱神社 | 昭和49年3月20日 | 下田市白浜 |
| 35 | 史跡 | 三穂ヶ崎遺跡 | 下田市 | 昭和49年3月20日 | 下田市白浜 |
| 36 | 史跡 | 夷子島遺跡 | 須崎財産区 | 昭和49年3月20日 | 下田市須崎 |
| 37 | 史跡 | 洗田遺跡 | 私有地 | 昭和49年3月20日 | 下田市吉佐美 |
| 38 | 史跡 | 遠国島遺跡 | — | 昭和49年3月20日 | 下田市田牛 |
| 39 | 史跡 | 深根城址 | 私有地 | 昭和51年5月27日 | 下田市堀之内 |
| 40 | 史跡 | 下田奉行所跡 | 下田市 | 昭和51年5月27日 | 下田市東中 |
| 41 | 史跡 | 吉田松陰踏海の企跡 | 下田市 | 昭和51年5月27日 | 下田市柿崎弁天島 |
| 42 | 史跡 | 吉田松陰拘禁之跡 (長命寺跡) | 下田市 | 昭和51年5月27日 | 下田市四丁目 |
| 43 | 史跡 | 下田御番所跡 | 下田市 | 昭和51年5月27日 | 下田市三丁目 |
| 44 | 史跡 | 欠乏所跡 | 私有地 | 昭和51年5月27日 | 下田市三丁目 |
| 45 | 史跡 | 武ガ浜波除けと今村公勤功碑 | 国有地 | 昭和51年5月27日 | 下田市武ガ浜 |
| 46 | 史跡 | 薩摩十六烈士の墓 | 大安寺 | 昭和51年5月27日 | 下田市四丁目(大安寺) |
| 47 | 史跡 | カナヤマ古代製鉄遺跡 | 私有地 | 昭和51年5月27日 | 下田市大賀茂 |
| 48 | 史跡 | 三穂ヶ崎台場遺跡 | 下田市 | 平成23年12月1日 | 下田市白浜 |
| 49 | 名勝 | 爪木崎一俵磯海岸 | 須崎財産区 | 昭和51年5月27日 | 下田市須崎 |
| 50 | 名勝 | タライ崎一釜の浦海岸 | 国有地 | 昭和51年5月27日 | 下田市田牛 |
| 51 | 天然記念物 | はまぼう樹林 | 国有地 | 昭和44年4月25日 | 下田市吉佐美 |
| 52 | 天然記念物 | 大公孫樹 | 諏訪神社 | 昭和46年9月6日 | 下田市横川(諏訪神社) |
| 53 | 天然記念物 | ヒカリモ | 旭洞院 | 昭和48年10月6日 | 下田市須崎(旭洞院) |
| 54 | 天然記念物 | 枝垂れ桜 | 報本寺 | 昭和51年5月27日 | 下田市加増野(報本寺) |
| 55 | 天然記念物 | 山ざくら | 私有地 | 昭和51年5月27日 | 下田市堀之内 |
| 56 | 天然記念物 | しもだまいまい | — | 昭和51年5月27日 | 下田市内全域 |

ちょうらくじ 長楽寺（史跡）

長楽寺の創建は弘治3年（1557）、尊有が開山したのが始まりと伝えられている。幕末の外交の舞台でもあり、安政元年（1854）には筒井政憲・川路聖謨つついまさのり かわじとしあきらとプチャーチン（ロシア使節海軍中將）との間で日露和親条約が締結され、安政2年（1855）には井戸覚弘いどさとひろ等と米国使節アダムス中佐との間に日米和親条約批准書の交換が行われた場である。



長楽寺

下田城址（史跡）

現在の下田公園全域が下田城址である。天正16年（1588）秀吉の小田原攻めに備えて築城された後北条方ごほうじょうの水軍拠点。天守台と呼ばれる中心部分くるわ からぼりの曲輪や空堀等がよく残されている。天正18年（1590）3月上旬、豊臣氏の水軍脇坂安治、長曾我部元親等総勢1万を超える軍政に攻められ、城将清水康英はおよそ50日に渡って籠城ろうじょうした後、開城した。



下田城址の深堀

たけ はまなみよ ろっこひ 武ガ浜波除けと今村公勅功碑（史跡）

江戸時代初期、下田の町は大波の被害を直接受け、町民は度々危険に脅かされていた。第二代下田奉行今村伝四郎正長はこの危険から町民を守るため私財を投じて波除けの建設を行い、正保2年（1645）に完成した。勅功碑は、今村公の功績をたたえ、名主三名が同年に建立した記念碑である。



武ガ浜波除け

さんばそう
三番叟（無形民俗文化財）

かつては伊豆を代表する民俗芸能として各地で奉納されていた三番叟であるが、現在ではその数が激減し、下田市においても白濱^{しらはま}神社の奉納三番叟のみとなった。白濱神社ではおよそ300年前から10月の秋祭りに奉納され、地元若衆によって傳承されている。



白濱神社の三番叟

おびしゃ
鬼射（無形民俗文化財）

落合の高根白山神社に古くから伝えられている神事。行事は弓太郎^{ゆんだろう}1名、役者2名、シャクトリ2名が中心となって行われる。複雑な儀式を経て射手である役者が、裏側に大きく「鬼」と書かれた的を射る。見事に的を射通せば、その年の災厄は退散し、五穀豊穡は疑いないといわれている。



落合・高根白山神社の鬼射

さんずいんごんげんさいはたまわ
山随院権現祭幡廻し（無形民俗文化財）

加増野の報本寺で毎年8月11日に開催される行事で、元々は領主の霊を祭る行事に厄除けの祈願、五穀豊穡の祈願も加わって現在の形になったと考えられている。

長さ7m程の孟宗竹を、禰宜^{ねぎ}の指揮のもと八人組の若衆とアトヒキといわれる15人程の若衆が境内を9回引き回し9回とも竹を倒すことなく廻しければその年は豊作で厄病は退散すると伝えられている。



報本寺の山随院権現祭幡廻し

(4) 主な未指定文化財

ほうふくじ 宝福寺

嘉永7年(1854)、日米和親交渉に当たり、日本全権の本陣となり、下田奉行所が置かれた。慶応元年(1865)に葦山代官江川氏の農兵調練所、明治には初代賀茂郡役所が置かれた。

それ以前には、勝海舟が山内容堂と、坂本龍馬の脱藩をした罪の許しを乞う会談を行った場所でもある。唐人お吉の墓所があり、お吉ゆかりの寺としても知られている。



宝福寺

しもだ はちまんじんじゃ 下田八幡神社

下田八幡神社は、正応元年(1288)頃、既に鎮座していたと伝えられている。永正4年(1507)11月に再建された。

毎年8月14日・15日には、大坂夏の陣で勝利を収めた徳川の軍勢が、大坂城入城の際に打ち鳴らした陣太鼓を、後の下田奉行今村伝四郎正長公が伝えたといわれる下田太鼓祭りが行われている。



下田八幡神社(拝殿)

しらはまじんじゃ 白濱神社

伊豆の最古の社といわれる。主祭神は三嶋大明神のきさき後の神、伊古奈比咩命いこなひめののみこと。伝承によると、伊古奈比咩命は三嶋大明神とともに、三宅島に座していたが、白浜に移り伊豆諸島を治め、伊豆神族の宗社として崇敬を集めてきたという。後に三嶋大明神は国府の置かれた三島に移ったため、この地を古宮という。境内には国指定の天然記念物のアオギリ自生地や県指定の天然記念物ビャクシン樹林が見られる。



白濱神社(拝殿)

(5) 下田まち遺産

下田市には、自然、歴史、文化、人の暮らしに関連する貴重な資源が数多くあり、その中で、市民が誇りに思い、次代へ継承していくべき、下田を象徴し、下田らしさが感じられるものを下田まち遺産として、下田市景観まちづくり条例で位置付けている。下田市景観まちづくり条例第7～9条における下田まち遺産認定・登録制度は、市民からの公募をもとに下田認定まち遺産を決め、認定されたまち遺産のうち、所有者等が、現状を維持し、積極的に保全・活用などに取り組んでいくことに同意したものを下田登録まち遺産としている。平成30年（2018）2月時点で、下田認定まち遺産は142件あり、下田登録まち遺産は12件ある。

きゅうさわむらてい

旧澤村邸（下田登録まち遺産）

旧澤村邸は、なまこ壁と伊豆石造りの建築様式を用いた建造物で、大正4年(1915)に建築された。その後外観のなまこ壁を修復しながら耐震改修を行い、現在は無料休憩施設として観光客を迎え入れている。



旧澤村邸

ハリスのこみち小径（下田認定まち遺産）

タウンゼント・ハリスが日米通商条約締結交渉中に胃潰瘍を患い、望郷の思いにふけりながら歩いたといわれる海沿いの道。現在は玉泉寺のある柿崎かきさきから須崎すざきまで、石畳の遊歩道になっている。



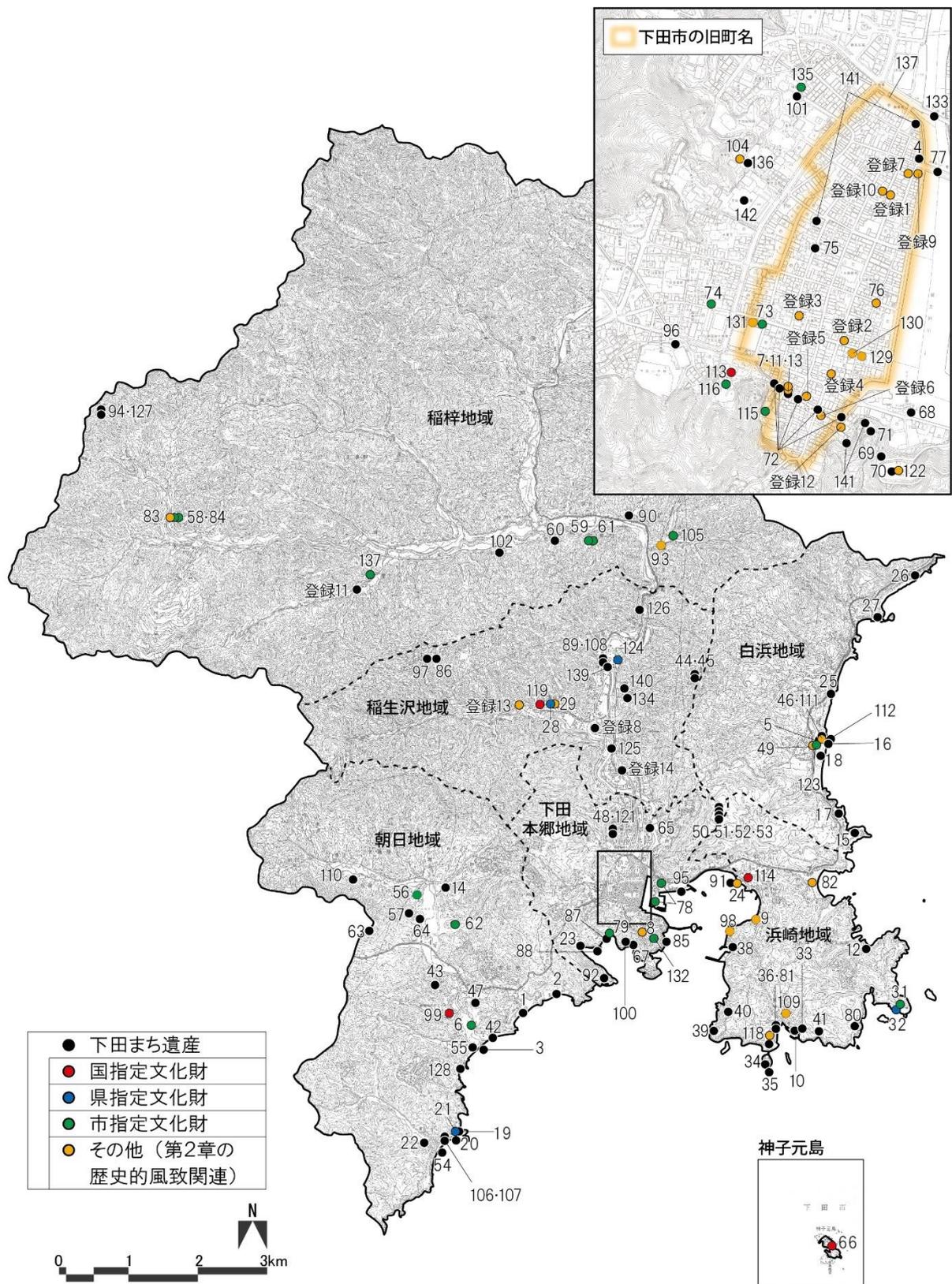
ハリスの小径

〔眺望点〕下田公園開国ひろば（下田認定まち遺産）

下田公園内にある開国ひろばは、港と下田のまちなみを一望できる眺望点として、知られている。



〔眺望点〕下田公園開国ひろば



下田まち遺産位置図

（図中の番号は次頁以降の下田まち遺産一覧の番号に対応している。）

下田まち遺産一覧

(下田まち遺産の番号は、認定番号及び登録番号)

| | | | |
|-----------------|------------------|------------------------|--------------------|
| 登録1 雑忠 | 28 吉田松陰寓寄処 | 67 和歌の浦遊歩道 | 106 田牛八幡神社獅子舞 |
| 登録2 松本旅館 | 29 蓮台寺湯の華小径 | 68 ペリー上陸記念碑 | 107 田牛八幡神社おっぴいしゃり |
| 登録3 櫛田蔵 | 登録13 蓮台寺温泉しだれ桃の里 | 69 下田公園ハナミズキと記念碑 | 108 お吉祭 |
| 登録4 安直楼 | 31 爪木崎 | 70 下田公園アジサイ | 109 須崎津島神社例大祭 |
| 登録5 土佐屋 | 32 柱状節理 | 71 下岡蓮杖記念碑 | 110 大賀茂山神社神楽の舞 |
| 登録6 草画房 | 33 庚申堂と西国三十三観音 | 72 ペリーロード五橋梁 | 111 白濱神社火達祭 |
| 登録7 石原邸 | 34 恵比須島 | 73 欠乏所跡 | 112 白濱神社御幣流祭 |
| 登録8 高橋邸 | 35 若山牧水歌碑 | 74 吉田松陰拘禁之跡 | 113 了仙寺 |
| 登録9 加田邸 | 36 築城石 | 75 ハンギングバスケット通り | 114 玉泉寺 |
| 登録10 鈴木邸 | 37 須崎御番所跡 | 76 ひもの横丁 | 115 長楽寺 |
| 登録11 渡邊蔵 | 38 吉田松陰上陸の碑 | 77 【眺望点】みなと橋 | 116 今村家三代の墓 |
| 登録12 旧澤村邸 | 39 須崎御台場跡 | 78 武ヶ浜波除と今村公勤功碑 | 117 下田節 |
| 1 入田浜 | 40 須崎遠見番所跡 | 79 下田御番所跡 | 118 天草ボン作り |
| 2 多々戸浜 | 41 灯明場跡 | 80 須崎歩道 | 119 蓮台寺天神神社大日如来坐像 |
| 3 吉佐美大浜 | 42 舞磯浜 | 81 民宿発祥の地石碑 | 120 下田富士 溶岩節理 |
| 4 加田本家 | 43 佛谷山石仏群 | 82 外浦海岸 | 121 【眺望点】下田公園開国ひろば |
| 5 白濱神社末社 | 44 高根山 | 83 娑婆羅山 報本寺 | 122 三番叟 |
| 6 はまぼう樹林 | 45 【眺望点】高根山 | 84 報本寺山随院権現祭幡廻し | 123 宝篋印塔 |
| 7 平滑川 | 46 白濱神社 | 85 ベイサイドプロムナード | 124 徳本上人名号塔 |
| 8 下田公園 | 47 多景山 | 86 辻の段 | 125 百地藏 |
| 9 【眺望点】ハリスの小径 | 48 下田富士 | 87 大浦・鍋田海岸 | 126 娑婆羅山 考子伝(伝説) |
| 10 小白浜 | 49 天草倉庫 | 88 大浦海岸石灯籠 | 127 亜相浜 |
| 11 ペリーロードガス灯 | 50 寝姿山 | 89 お吉ヶ淵 | 128 土藤商店 |
| 12 九十浜海水浴場 | 51 【眺望点】寝姿山 | 90 いんぼ沢とお地藏様 | 129 土藤蔵ギャラリー |
| 13 ペリーロード | 52 寝姿山の寒桜 | 91 吉田松陰先生像 | 130 平野屋 |
| 14 大賀茂れんげ祭り | 53 寝姿山のつわぶき | 92 狼煙崎舳い石 | 131 下田城址 空堀 |
| 15 白浜三穂ヶ崎 | 54 田牛海岸 | 93 稲梓の鉄橋(通称) | 132 新下田橋 人魚像 |
| 16 白濱神社御三釜 | 55 神子元島燈台石碑 | 94 娑婆羅山 | 133 河内諏訪神社 奉納相撲 |
| 17 獅子鼻岬 | 56 金山遺跡 | 95 下田漁港金目鯛 | 134 稲田寺 阿弥陀如来坐像 |
| 18 白浜大浜海岸 | 57 民話 荒井の長者 | 96 下田小学校校歌 | 135 下田八幡神社 仁王像 |
| 19 田牛サンドスキー場 | 58 報本寺枝垂桜 | 97 下大沢 庚申塔 | 136 下田市の旧町名 |
| 20 龍宮窟 | 59 深根城址 | 98 ハリスの小径 | 137 大公孫樹 |
| 21 ハマオモト自生地 | 60 茶々丸の墓 | 99 吉佐美八幡神社 イスノキ・楠・イチヨウ | 138 お吉桜 |
| 22 青少年海の家 | 61 山桜 | 100 【眺望点】志太ヶ浦展望台 | 139 河内諏訪の河津桜 |
| 23 鍋田浜 | 62 洗田遺跡 | 101 稲田寺 津なみ塚 | 140 旧町内のお稻荷さん群 |
| 24 弁天島 | 63 三倉山 | 102 菖蒲の墓 | 141 下岡蓮杖翁肖像 |
| 25 白浜中央海岸 | 64 大賀茂遺跡 | 103 河内諏訪神社 手筒花火 | 登録14 田中邸 |
| 26 【眺望点】尾ヶ崎ウイング | 65 本郷公園桜並木 | 104 下田太鼓祭り | |
| 27 アロエの里 | 66 神子元島燈台 | 105 落合高根白山神社 鬼射 | |

■国指定文化財 ■県指定文化財 ■市指定文化財 ■その他(第2章の歴史的風致関連)

(6) 特産品、工芸品、料理

①特産品

わさび

平成28年(2016) 特用林産物生産統計調査(林野庁)によると、静岡県はわさび(根茎)の生産量が全国一である。

豊富な湧水を活用し、自然生態系と共生しながら高品質なわさびを持続的に生産する栽培システムは、平成29年(2017)に「静岡水わさびの伝統栽培」として日本農業遺産に認定され、平成30年(2018)には世界農業遺産に認定された。下田市は認定された栽培地域のひとつであり、須原^{すはら}などの豊かな山水の恵みを受けて育ったわさびは逸品で、土産として昔から人気がある。



下田わさび

金目鯛

下田港は金目鯛の水揚げが日本一^{※16}である。そこで揚がった新鮮な金目鯛は刺身、姿煮、鍋、粕漬、干物など色々な食べ方ができる。毎年6月1日から30日にかけて「きんめ祭り」が開催され、道の駅開国下田みや市内各所で多様なメニューの金目鯛を楽しむことができる。



金目鯛の姿煮

※16 平成29年度魚種別系群資源評価(水産庁)及び銚子市漁業協同組合資料、伊豆漁業協同組合資料

②工芸品

しもだやにまつざいく 下田脂松細工

江戸時代の末期から続く郷土工芸品であり、黒松の脂の多い部分を使って作る木工芸品で、木目や色合いの美しさが特徴である。皿、盆、茶具や箱などがあり、昭和55年(1980)に静岡県郷土工芸品に指定された。



下田脂松細工

③郷土料理・名物

ところてん

下田の海で採れる天草は、黒潮の流れにあたり太く、ねばりのある上質なものである。海女が手づかみで収穫し、干したあとに選別作業を丁寧に行うことで、高い品質を保つことができ、全国でも評価されている。その良質な天草を使ったところてんは逸品であり、下田の名物になっている。



ところてん

いけんだ煮味噌

漁師汁ともいい、場所や漁の獲れ具合によってその中身が変わる。この名前は、漁師鍋全般の総称としても使われ、「いけんだ」は須崎半島の先端に位置する爪木崎つめきざきの「池の段」という地名が訛ったものである。現在は須崎エリアの旅館や店、家庭でも食べられる。出汁は、フジツボ、カメノテなど、磯のものを入れてとり、具は伊勢エビ、サザエ、精進ガニ、磯魚などが入っている。



いけんだ煮味噌鍋

白浜名物 さんま寿司

さんま寿司は、秋祭りや祝いの席で欠かすことのできない郷土料理である。その昔、凶作に苦しむ白浜の人々のために、白濱神社の神官が祈祷を行ったところ、次々にさんまが浜に打ち上げられ、それをご飯にのせて庶民に振る舞ったのがはじまりという。

毎年10月から12月にかけて、下田エリア全体でさんま寿司まつりが開催されている。各家庭で代々引き継がれた味があり、それぞれに微妙に味が違うのも白浜のさんま寿司の特徴である。



さんま寿司